

ジバーリ・アラビア語（エジプト・シナイ半島南部）の構造と系統

著者	西尾 哲夫
雑誌名	国立民族学博物館研究報告
巻	31
号	2
ページ	159-225
発行年	2007-02-02
URL	http://doi.org/10.15021/00003965

ジバーリ・アラビア語(エジプト・シナイ半島南部) の構造と系統

西尾哲夫*

Characteristics of Jibālī Arabic or the Bedouin Arabic dialect of
the Jibālī tribe of the southern part of the Sinai Peninsula, Egypt

Tetsuo Nishio

ジバーリ・アラビア語は、エジプトのシナイ半島南部に住むベドウィン、ジバーリ部族が話すアラビア語方言である。西暦6世紀にビザンツ皇帝ユスティニアヌスI世が聖カトリヌ修道院を創建したとき、ボスニア（旧ユーゴスラビア南西部）、ワラキア（ルーマニア南部）、アレキサンドリア（エジプト）から二百家族余りの農奴を強制移住させて、修道僧の警護や身辺雑事にあたらせていた。彼らの子孫が現在のジバーリ部族であるとされている。

言語の面では、移住当初はラテン語の方言を話していたらしいが、徐々にアラビア語を話すようになり、現在では独特の方言特徴を持っているもの、いわゆるベドウィン系のアラビア語方言に分類できるアラビア語を話している。アラビア語化の過程で特殊なアラビア語が発生していた可能性が非常に高く、コミュニケーションのための共通語を持たない集団間で一時的に用いられる言語であるピジンのアラビア語が生まれ、やがて特定集団の母語として定着していく過程において、不完全なものであったピジンのアラビア語を言語として十分機能させるために、どちらの言語のものでもない特徴や規則を持ったクレオールのアラビア語が生まれたと推定される。

本論文では、まずジバーリ・アラビア語の言語構造の記述分析として、特にアラビア語の比較方言学的観点から重要であるジバーリ・アラビア語の言語特徴に焦点を当てながら、音韻論と形態論について記述的分析を行なう。次に、ジバーリ・アラビア語がいわゆる遊牧民方言（ベドウィン方言）の諸特徴を有しながら、都市部定住民方言の共通特徴も有する一方で、他のアラビア語諸方

*国立民族学博物館民族社会研究部

Key Words : Arabic dialect, Bedouin Arabic dialect, Egypt, Sinai Peninsula, Jibālī tribe

キーワード : アラビア語方言, ベドウィン方言, エジプト, シナイ半島, ジバーリ部族

言には観察されない独特の方言特徴を有していることについて、比較方言学的観点からジバーリ・アラビア語の系統の問題を議論する。北西アラビア半島方言のなかでも西部グループに属する南シナイ方言の一つであるジバーリ・アラビア語は、新たに地域方言として形成されてきた南シナイ方言の特徴を共有することで言語的同化をはかった。さらに、これと平行しながら、南シナイ地域における部族集団間関係におけるジバーリ部族の社会的位置が原因となって、自らの集団的アイデンティティー保持のための言語的指標を確立するという言語生態的動因による社会的力学が働き、独特の孤立的方言特徴が発展してきたと推定される。

In this paper, I will present a descriptive analysis of Jibāli Arabic, or the Bedouin Arabic dialect of the Jibāli tribe of the southern part of the Sinai Peninsula, Egypt, with some discussion about the linguistic genealogy of their language from the viewpoint of historical and comparative Arabic dialectology.

The ethnic origin of the Jibāli tribe is very mysterious. It is recorded in the Chronicle of Eutychius, Patriarch of Alexandria in the ninth century, that when the Byzantine emperor Justinian (527–565 A.D.) built the Monastery of St. Catherine, he settled by it some 200 families brought from the northern shore of Anatolia and from Alexandria in order to serve and protect the monks of the Monastery. The people of the Jibāli tribe are the offspring of these families, who originally lived as serfs in the present district of Bosnia (the southwestern part of the former Yugoslavia, Wallachia (the southern part of Rumania), and Alexandria (Egypt). It is worth noting that they proudly see themselves as Greeks or at least as descendants of Greeks, and interestingly enough, at the same time, they have a strong inclination toward ethnic identity as Arab in its rather original sense, that is, Bedouin. The people of the Jibāli tribe are today Muslims. But, at the time of their settlement, they embraced Christianity, and their conversion to Islam was a comparatively recent affair.

It is not clear what language they were speaking when they settled in Sinai. Still less is it clear when they began to speak Arabic. Based on a little fragmentary historical knowledge about the linguistic situation around the sixth century, we can tentatively say that as for the people who came from Bosnia and Wallachia, their original language was a dialect of (vulgar) Latin. Whatever language they spoke before their acquisition of Arabic, they must have learned to speak Arabic in a very short time after the arrival of Arabic-speaking Bedouin from the Arabian Peninsula. It is inferred from the circumstances in which they lived and their needs, such as the procurement of daily necessities and food from the Arabic-speaking tribes in their neighborhood, that their first Arabic was pidgin-like and used only or mainly for the purpose of commerce, which became a linguistically full-fledged mother tongue as spoken at the present time through the processes of creolization and de-creolization.

1 はじめに	3.1.1 独立代名詞
1.1 ジバーリ部族とジバーリ・アラビア語	3.1.2 接尾代名詞
1.2 言語データについて	3.2 指示詞
2 音韻論	3.2.1 指示代名詞
2.1 子音	3.2.2 指示接頭辞 <i>ha</i>
2.1.1 子音体系	3.2.3 指示副詞
2.1.2 歯間摩擦音 /θ/, /ð/, /ð/ の保持	3.3 疑問詞
2.1.3 /q/ とその反射形 /g/	3.4 名詞
2.1.4 声門閉鎖音 (ハムザ)	3.4.1 女性形語尾 (<i>tā' marbūta</i>)
2.1.5 無声化	3.4.2 双数形
2.1.6 帯気化	3.4.3 複数形
2.1.7 強調音化	3.5 動詞
2.1.8 同化	3.5.1 強動詞の完了形
2.1.9 <i>gahawa</i> シンドローム	3.5.2 強動詞の未完了形
2.2 母音	3.5.3 強動詞の命令形
2.2.1 短母音	3.5.4 弱動詞
2.2.2 短母音 /u/ とその異音	3.5.4.1 C ₁ =w の動詞
2.2.3 短母音 /i/ とその異音	3.5.4.2 C ₁ = ^o (ハムザ) の動詞
2.2.4 短母音 /a/ とその異音	3.5.4.3 C ₂ =w ~ y の動詞
2.2.5 シュワー母音 [ə]	3.5.4.4 C ₂ = ^o (ハムザ) の動詞
2.2.6 ジバーリ・アラビア語の短母音記述のための音声表記	3.5.4.5 C ₃ =y の動詞
2.2.7 長母音	3.5.4.6 C ₃ = ^o (ハムザ) の動詞
2.2.8 強勢 (アクセント)	3.5.4.7 C ₂ =C ₃ の動詞
2.2.9 イマーラ	3.5.5 「来る」の動詞
2.2.10 音節構造	3.5.6 「与える」の動詞
3 形態論	3.5.7 「見る」の動詞
3.1 代名詞	4 ジバーリ・アラビア語の系統

略語表

- sg=singular (単数形)
- du=dual (双数形)
- pl=plural (複数形)
- m=masculine (男性形)
- f=feminine (女性形)
- c=common gender (男女同形)
- nom=nominative (主格)
- acc=accusative (対格)
- gen=genitive (属格)
- S=Subject (主語)
- V=Verb (動詞)
- O=Object (目的語)
- Ad=Adverb (副詞)
- T=Topic (話題語)
- F=Focus (焦点語)
- pro ~ p=pronoun (代名詞)
- rel.=relative (関係詞)
- v.=verb (動詞)
- trans.=transitive (他動詞)
- intrans.=intransitive (自動詞)
- adj.=adjective (形容詞)
- conj.=conjunctive (接続詞)
- Pf.=Perfect (完了形)
- Impf.=Imperfect (未完了形)
- Impr.=Imperative (命令形)
- Ap.=active participle (能動分詞)
- Cl.A.=Classical Arabic (古典アラビア語)
- MSA=Modern Standard Arabic (現代標準アラビア語)
- Cairene Ar. ~ CA=Cairene Arabic (アラビア語カイロ方言)
- lit.=literally means (文字通りの意味)
- = 共時的派生または変形
- > = 通時的变化

1 はじめに¹⁾

1.1 ジバーリ部族とジバーリ・アラビア語²⁾

ジバーリ部族はエジプトのシナイ半島南部に住むベドウィン（アラブ遊牧民）である。ジバーリ（Jibālī）³⁾ という名前は、アラビア語の「山」を意味するジャバルの複数形ジバルから派生した形であり、本来は「山の人々」を意味する。

西暦6世紀にビザンツ皇帝ユスティニアヌスI世が聖カトリヌ修道院を創建したとき、ボスニア（旧ユーゴスラビア南西部）、ワラキア（ルーマニア南部）、アレキサンドリア（エジプト）から二百家族余りの農奴を強制移住させて、修道僧の警護や身辺雑事にあたらせた。彼らの子孫が現在のジバーリ部族であるとされている。かつては聖カトリヌ修道院周辺に住んでいたが、現在ではワーディ・フェイラーンやトゥール近郊にも居住している。ウヘーバート、ヘーマート、アウラード・ジュンディー、ハマーイデという四支族に分かれており、全体の構成員数はほぼ千人弱と推定される。イスラム教が勃興する以前はキリスト教を信仰していたが、アラブ系諸部族との交渉が増すにつれてイスラム教を受け入れた。

西暦10世紀にエウティキウスが著した『年代記』では、ジバーリ部族の祖先に対して「家内奴隷（召使）」という表現を使っている。移住当初の彼らは、血縁や地縁で結ばれた民族集団というよりはむしろ、修道院の警護と身辺雑務の世話の二つを基本的役割とする、様々な技術を持った人々の集団だったらしい。そのような状況のなかでジバーリ部族の人々は、周辺諸部族との日常的な接触を通じて徐々にベドウィンの部族組織や生活様式を学んだと思われる。シナイ半島をめぐる国際情勢の変化は、ジバーリ部族と南シナイの諸部族、そして聖カトリヌ修道院との関係にも大きな影響を与えた。現在では、約三十人ほどのジバーリ部族の男性が聖カトリヌ修道院での労働に従事している。労働の内容は基本的に修道僧や農園の世話である。一定期間の労働が終わると、族長の任命によって別の部族員が交代するシステムになっている。労働賃金も聖カトリヌ修道院外の場所での相場にみあっており、形式上は通常の労使関係とかわらない。賃金労働の機会の増加や部族人口の増加によって、物理的にも聖カトリヌ修道院から離れて生活を営む者が増えている。

言語の面では、移住当初はラテン語（あるいはギリシア語か）の方言を話していたらしいが、徐々にアラビア語を話すようになった⁴⁾。現在では独特の方言特徴を持っているものの、いわゆるベドウィン系のアラビア語方言に分類できるアラビア語を話

している。ジバーリ部族の話す言葉がアラビア語化していった過程については資料がまったく残っていないので詳しくはわからない。様々な断片的証拠を考え合わせると⁵⁾、アラビア語化の過程で特殊なピジン・クレオールのアラビア語が発生していた可能性が非常に高い。最初期のジバーリ部族は、圧倒的優位にたっていた周辺のベドウィン諸部族を相手に物々交換をはじめとする取引をしなくてはならなかった。そのさいには、優位にあるベドウィンが使用していた語彙を借用し、具体的かつ日常的な内容のみを話題にしたと思われる。コミュニケーションのための共通語を持たない集団間で一時的に用いられる言語であるピジンのアラビア語が、特定集団の母語として定着していく過程において、不完全なものであったピジンのアラビア語を言語として十分機能させるために、どちらの言語のものでない特徴や規則が生まれ、クレオールのアラビア語が生まれたと推定される。その後、いわゆる脱クレオール化の過程のなかで、周囲のベドウィン方言への同化作用によって地域共通の言語特徴を獲得していく一方、ジバーリ部族としての集団的アイデンティティーのための言語的指標を保持する言語的社会力学による異化作用によって、独自の言語特徴を発達させていったと推定できる。

1.2 言語データについて

ジバーリ・アラビア語の分析のために用いる言語データは、すべてシナイ半島南部における参与調査によって収集したものである。基本となるデータは、主として以下の三人のジバーリ部族のんびとから聞き取ったものである。

S氏(男性)⁶⁾：1908年にワーディ・フェイラーンで生まれた。1967年まで同地に住み、その後トゥールの町へ家族とともに引っ越した。

M婦人(女性)⁷⁾：1942年にワーディ・フェイラーン近くのバガーボグというジバーリ部族だけが住む村に生まれた。S氏の長男と結婚して、ワーディ・フェイラーンに移り住み、1967年に家族とともにトゥールへ引っ越した。

K嬢(女性)：S氏の長男とM婦人の娘で、1970年にトゥールで生まれた。双子の姉妹の妹である。

三人とも敬虔なムスリムである。とくにS氏はコーランの章句を暗唱しているほどであるが、文字を読むことはできない。彼の家系はジバーリ部族の重要な聖者につながる家系で、ジバーリ部族のシェイフ(族長)とも姻戚関係にあり、現在は息子の代になってはいるものの、ジバーリ部族内でも一目置かれる存在である。そのためにシナイ半島内の部族関係やジバーリ部族の社会について詳しい。M婦人も文字を読

むことができないが、ジバーリ部族に口承で伝わる伝説や民話をそらんじており、バガーボグ⁸⁾という沙漠のなかの村で伝統的な暮らしを経験したこともあって、ジバーリ部族の生活文化に詳しい。K嬢は学校教育を受けており、標準アラビア語および英語の読み書きができる。三人の全員がテレビやラジオなどの影響もあり、カイロ方言が理解できる。S氏とM婦人の話す言葉が、男性と女性という違いはあるものの、異同があまりないのに対して、K嬢の言葉はトゥールの町言葉やカイロ方言の影響をより多く受けている。とくに中年以上のジバーリ部族の人びとにも当てはまることではあるが、S氏のような男性の方が、言語生活において場面と会話相手に応じていくつかの社会方言を使う言語運用能力を持っている一方、M婦人のような比較的高齢の女性の方が、より保守的な古い言語形式を使用する傾向にある⁹⁾。特記すべきこととして、イスラエル占領時代に当局がジバーリ部族を重用したこともあり、中年以上の人々の多くは日常会話程度の現代ヘブライ語の運用力を有している。

以下の記述言語学的分析では、特にアラビア語の比較方言学的観点から重要であるジバーリ・アラビア語の言語特徴に焦点を当てながら、音韻論と形態論について記述的分析を行なう。

2 音韻論

2.1 子音

2.1.1 子音体系

ジバーリ・アラビア語における子音の音素体系は以下の表に示す通りである。

表1 ジバーリ・アラビア語の子音体系¹⁰⁾

	破裂音	摩擦音	強調音(咽頭化音)	鼻音	接近音
両唇	b			m	w
唇歯		f			
歯間		θ / ð	ð̣		
歯	t / d	s / z	ṭ / (ḍ) / ṣ	n	r
歯茎口蓋		ʃ / ʒ			
口蓋					y
側音					l
軟口蓋	k / g				
口蓋垂	(q)	χ / ʕ			
咽頭		ħ / ʕ̣			
声門	(ʔ)	h			

有声／無声の対立による子音の系列に加えて、アラビア言語学で強調音 (emphatics) あるいは強勢子音 (emphatic consonants) とよばれる咽頭化音の系列がある。括弧で示した音素 (/q/, /p/, /d/) は、標準アラビア語 (古典アラビア語) またはアラビア語カイロ方言からの借用語のなかで生起する子音である。以下、比較方言学的に重要な項目について記述する。

2.1.2 歯間摩擦音 /θ/, /ð/, /ð̣/ の保持

無声の歯間摩擦音 /θ/ が保持されている。例：/θɔb/ 「着物」(II-1)¹¹⁾；/maθal/ 「ことわざ」(X-18)；/mihrāθ/ 「すき」(V-26)。語末にくる場合には、/barġūθ ~ barġūt/ 「のみ」(XIX-51) のように、対応する閉鎖音となることもある¹²⁾。

有声の歯間摩擦音 /ð/ が保持されている。例：/ðahab/ 「金」(XVII-67)；/kðūb/ 「うそ」(X-19)；/χað (Pf.)/ 「取る」(XIV-2)。/zirdebbe ~ zirðebbe/ 「岩山」(XVII-35)¹³⁾ や /migðāf ~ migdāf/ 「かい、オール」(IX-33) のように、対応する閉鎖音による変異形がみられる場合もある¹⁴⁾。

有声歯間摩擦音の強調音 /ð̣/ が保持されている。例：/ð̣ef/ 「客人、お客」(VII-38)；/að̣īm/ 「偉い」(XXI-33)；/arð̣/ 「土地、地面」(XVII-33)。カイロ方言の影響によって、対応する閉鎖音の形式が特に若い世代で使用されるようになっている。例：/χoð̣ār ~ χoðār/ 「野菜」(III-15)¹⁵⁾。

2.1.3 /q/ とその反射形 /g/

古典アラビア語の /q/ は有声の /g/ である。例：/gāl (Pf.)/ 「言う」(X-6)；/bagara/ 「牛」(XIX-11)；/warag/ 「葉」(XVIII-9)¹⁶⁾。古典アラビア語あるいは現代標準アラビア語からの借用語では、無声の /q/ が保持される。例：/garye ~ qarye/ 「村」(VIII-1)¹⁷⁾。

2.1.4 声門閉鎖音 (ハムザ)

語頭のハムザ：語頭のハムザ音は脱落するか、/w/ に変化する。例：/wakl ~ ak/ 「食べ物」(III-1) (<*/akl/)。第1語根がハムザ音の動詞の場合は、ハムザ音のみが脱落するか、あるいはハムザ音を含んだ音節が脱落し、2語根動詞となる。例：/amar (Pf.)/ 「命令する」(X-35) (<*/amara/)；/kal (Pf.)/ 「食べる」(III-43) (<*/akala/)；/χað (Pf.)/ 「取る」(XIV-2) (<*/aχaða/) ¹⁸⁾。

語中のハムザ：語中のハムザ音は脱落し、先行の母音が補償的に長母音化する。例：/rās/ 「頭」(I-1) (<*/ra's/) ¹⁹⁾。一部の動詞については、ハムザ音 (声門閉鎖音)

が咽頭摩擦音 /ʕ/ に変化している。例：/ra'a (Pf.)/ 「見(え)る」(I-73) (<*/ra'a/); /sa'al (Pf.)/ 「問う」(X-9) (<*/sa'ala/)

語末のハムザ：語末のハムザ音は脱落する。例：/gara (Pf.)/ 「読む」(X-28) (<*/qara'a/); /bada (Pf.)/ 「始める」(XV-3) (<*/bada'a/); /baṭī/ 「遅い, ゆっくりとした」(IX-19) (<*/baṭī'/)

2.1.5 無声化

語末の位置で有声の閉鎖音は無声化する傾向にあるが, 特に /g/ については無声化が顕著である。例：/sūg/ 「市(場)」(VIII-4) =[sūg ~ sūk]²⁰⁾。

2.1.6 帯気化

語末の位置で無声の閉鎖音は気音を帯びて発音される傾向にあるが, 特に二人称単数男性の接尾代名詞 /-k/ については帯気化が顕著である (/_C#+k/ → [_C+k^h]²¹⁾。

2.1.7 強調音化

強調音(咽頭化音)は隣接する子音に影響を及ぼす。例：/iṣṭād (Pf.)/ 「獵に行く, 狩る」(VIII-13) (<*/iṣṭād/); /maḡḡatt (Pf. 2 sg.m. ~ 1 sg.)/ 「伸ばす」(XIV-16) (<*/maḡḡatt/); /ṭṭamman (Pf.)/ 「安心する」(XVI-26) (<*/ṭṭamman/)²²⁾。

2.1.8 同化

順行同化(前接の子音に同化する場合)：

tt>tt 例：/ḡelett (Impf. 3 sg.f. ~ 2 sg.m.)/ 「間違える」(XXI-14) (<*/ḡelett/)²³⁾。

th>tt 例：/bētte (～ bēthe) / 「彼女の家」(IV-1); /taḥattom (～ taḥathom) / 「彼らの下」(XXII-9)²⁴⁾。

逆行同化(後接の子音に同化する場合)：

dt>tt 例：/wliitti (Pf. 2 f.)/ 「産む」(VI-1) (<*/wliidt/); /wa'att (Pf. 2 sg.m. ~ 1 sg.)/ 「約束する」(X-11) (<*/wa'adt/)²⁵⁾。

ḏt>tt 例：/ḥatt (Pf. 2 sg.m. ~ 1 sg.)/ 「取る」(XIV-2) (<*/ḥaḏt/)

td>dd 例：/ddarres (Impf. 3 sg.f. ~ 2 sg.m.)/ 「教える」(XVI-7) (<*/tdarres/)

tḡ>ḡḡ 例：/yitḡawwaz ~ yiḡḡawwaz (Impf.)/ 「結婚する」(VII-33)。

tz>zz 例：/zzahher (Impf. 3 sg.f. ~ 2 sg.m.)/ 「咲く」(XVIII-14) (<*/tzahher/)

ln>nn 例：/gunne (Pf. 1 pl.)/ 「言う」(X-6) (<*/gulne/); /nzinne (Pf. 1 pl.)/ 「下りる」

(XV-15) (<*/nzilne/) ; /asfanne/ 「私たちの下」 (XXII-9) (<*/asfalne/) ²⁶⁾。

相互同化 (互いに部分的に同化する場合) :

ʿh>ħħ 例 : /mahħa/ 「彼女といっしょ」 (XXII-25) (<*/maʿhe/) ²⁷⁾。調音位置は咽頭摩擦音のまままで無声化した場合である。

2.1.9 *gahawa* シンドローム ²⁸⁾

2子音が連続し、最初の子音が /ʕ/, /g/, /χ/, /ħ/, /h/ である場合、母音 /a/ が挿入されて音節が開音節化される ²⁹⁾。

/ʕ/ の例 : /yʕatos (Impf.)/ 「くしゃみをする」 (I-22) (<*/yaʕtus/) ³⁰⁾ ; /yʕarag (Impf.)/ 「汗をかく」 (I-67) (<*/yaʕrag/) ³¹⁾ ; /yʕaðer (Impf.)/ 「謝る」 (XIII-6) (<*/yaʕðer/) ³²⁾ ; /yʕaşer/ 「絞る, しめつける」 (XIV-17) (<*/yaʕşer/) ³³⁾。

/g/ の例 : /yağalib (Impf.)/ 「勝つ」 (VI-41) (<*/yağlib/) ; /yağalaṭ (Impf.)/ 「間違える」 (XXI-14) (<*/yağlaṭ/) ; /yağafer (Impf.)/ 「ゆるす」 (XVI-23) (<*/yağfer/) cf. /yağafru (Impf. 3 pl.m.)/ (<*/yağaferu/ <*/yağferu/) ; /yağaşa (Impf.)/ 「近づく」 (IX-3) (<*/yağşa/)。

/χ/ の例 : /naχale/ 「ナツメヤシ (の実)」 (XVIII-20) (<*/naχle/) ; /aχaðar/ 「緑の」 (XX-33) (<*/aχðar/) ; /yaχabaṭ (Impf.)/ 「殴る, 叩く」 (XIII-11) (<*/yaχbaṭ/) ; /yaχalaṭ (Impf.)/ 「混ぜる」 (XIV-54) (<*/yaχlaṭ/)。

/ħ/ の例 : /baħar/ 「海」 (XVII-54) (<*/baħr/) ; /taħat/ 「(～の)下」 (XXII-9) (<*/taħta/) ; /aħamar/ 「赤い」 (XX-30) (<*/aħmar/) ; /yaħafaḏ (Impf.)/ 「蓄える, 保存する」 (XIV-26) (<*/yaħfaḏ/) ³⁴⁾。

/h/ の例 : /nahar/ 「川」 (XVII-45) (<*/nahr/) ³⁵⁾ ; /zahara/ 「花」 (XVIII-12) (<*/zahra/) ; /gahawa/ 「コーヒー」 (III-31) (<*/qahwa/) ; /yaharab (Impf.)/ 「逃げる」 (VI-43) (<*/yahrab/)。

動詞の未完了形の場合、挿入された母音 /a/ にアクセントがある。例 : /aχabaṭu (Impr. pl.m.)/ = [aχábaṭu] (XIII-11)。

以下の例においては、*gahawa* シンドロームによる母音挿入というよりも、語末の2子音連続を避けるための母音挿入規則による形式と考えられる ³⁶⁾。例 : /roχow/ 「弱い」 (XXI-11) (<*/raχw/) ³⁷⁾ ; /ğoħor/ 「穴」 (XX-6) (<*/ğuhr/) ; /ðoħor/ 「正午, 真昼」 (XXIII-6) (<*/ðuhr/)。

2.2 母音

2.2.1 短母音

ジバーリ・アラビア語における短母音の音素体系は以下の表に示す通りである。

表2 ジバーリ・アラビア語の短母音

	前舌	中舌	後舌
高(狭母音)	i		u
中			
低(広母音)		a	

音韻論的に言えば、ジバーリ・アラビア語の短母音体系は標準アラビア語（あるいは古典アラビア語）と同じ三母音からなる体系であるが、以下で議論するように、これらの三母音の異音として出現する短母音 [e] と [o] についても、少なくとも音韻規則上は音素に準じるものとして扱える。

2.2.2 短母音 /u/ とその異音

短母音 /u/ は、主として後舌狭母音 [u] または後舌半狭母音 [o] として現れる。後者の [o] は基本的に、強調音（咽頭化音）、口蓋垂音 (/χ/, /ġ/), および /t/ に近接する音声環境で出現する。例：[ytoχχ (Impf.)] 「(銃で) 撃つ」(VI-51)；[yoðrob (Impf.)] 「殴る, 叩く」(XIII-11)；[moχχ] 「脳みそ」(I-4)；[šog] 「仕事, 職業」(VIII-36)；[romħ] 「槍」(VI-47)；[ħorme] 「女」(VII-3)。

ただし、次の例にあるように、基底に想定される長母音 /ō/ が音声レベルで短母音 [o] として現れる場合もある。例：[gotart (Pf. 2 sg.m. ~ 1 sg.)] cf. /gōtar/ 「行く」(IX-1)。この場合、基底形の /gōtar/ から強勢規則による強勢位置の移動とそれに伴う長母音 /ō/ の短母音化によって音声形式の [gotart] が現れるとみなすのが妥当な説明であろう³⁸⁾。

動詞活用形の語末母音が /u/ の場合、強勢が移動し強調されて発音されるときには [o] で現れ、[-ów#] となる。例：[ðárabu ~ ðarabów (Pf. 3 pl.m.)] 「殴る, 叩く」(XIII-11)。

2.2.3 短母音 /i/ とその異音

短母音 /i/ は、主として前舌狭母音 [i] または前舌半狭母音 [e] として現れる。後者の [e] は基本的に、強調音（咽頭化音）、口蓋垂音 (/χ/, /ġ/), および /t/ に近接する音

声環境で出現する。また、短母音 /u/ の異音である [o] の場合と同様の条件で、上記以外の音声環境においても出現する。例：[ħetta] 「場所」(XXII-1)；[yðell (Impf. 3 sg.m.)] 「迷う」(IX-13)；[wešel (Pf.)] 「着く」(IX-13)；[gelet] 「間違える」(XXI-14)；[rekeb (Pf.)] 「乗る」(IX-21)；[šā'er] 「詩人」(X-17)。

動詞活用形の語末母音が /i/ の場合、強勢が移動し強調されて発音されるときには [e] で現れ、[-éy#] となる。例：[tálbasi ~ talbaséy (Pf. 3 pl.f.)] 「着る」(II-2)。

2.2.4 短母音 /a/ とその異音

短母音 /a/ には主たる異音として、中舌広母音 [a] と、それより後ろよりの後舌広母音の [ɑ]、そしてさらに前舌半広母音の [ɛ] が観察される。二番目の [ɑ] は基本的に、強調音（咽頭化音）、口蓋垂音 (/χ/, /ǧ/)、および /r/ に近接する音声環境で出現する。

前舌半広母音の [ɛ] を短母音 /a/ の異音とみなすか、単独の音素として扱えるかについて問題が残る。この母音 [ɛ] は以下のような環境で出現する³⁹⁾。

- ① 標準アラビア語あるいは古典アラビア語の女性形の語末形式、いわゆるター・マルブータ (*tā' marbūṭa*) の -ah の反射形であるジバーリ・アラビア語の女性形は [-ɛ] で現れる。例：[gimme] 「山頂」(XVII-37)；[dīse] 「森」(XVII-41)；[barke] 「池、湖」(XVII-43)。ただし、強調音（咽頭化音）、口蓋垂音 (/χ/, /ǧ/)、咽頭音 (/ħ/, /ʕ/)、および /r/ の後に来る音声環境では、/-a/ ([-a] ~ [-ɑ]) となる。例：[tarħa] 「ベール」(II-8)；[gotṭa] 「猫」(XIX-9)；[bagara] 「牛」(XIX-11)。また、後続の名詞あるいは接尾代名詞による所有表現（いわゆるイダーファ）の場合、上記の音声環境で [-at] となる場合以外は、語末の女性形 -e は [-et] ~ [-et] ~ [-t] で現れる⁴⁰⁾。例：/siddāne/ 「ひたい」/siddānto/ ← /siddānet+o/ 「彼のひたい」(I-5)
- ② 標準アラビア語あるいは古典アラビア語の接尾代名詞、-hā 「彼女の、彼女を」と -nā 「私たちの、私たちを」のジバーリ・アラビア語における反射形はそれぞれ、[-he], [-ne] となる。
- ③ 標準アラビア語あるいは古典アラビア語のいわゆるアリフ・マクスーラのジバーリ・アラビア語における反射形は、[ɛ] となる。例：[nade] 「露」(XVII-7)⁴¹⁾。
- ④ 標準アラビア語あるいは古典アラビア語の動詞完了形の三人称単数女性形の標識である -at は、強調音（咽頭化音）、口蓋垂音 (/χ/, /ǧ/)、咽頭音 (/ħ/, /ʕ/)、および /r/ の後に来る音声環境では /-at/（より正確には [-at] ~ [-ɑt]）となるが、それ以外の音声環境では /-et/ となる。例：/ǧeltat (Pf. 3 sg.f.)/ 「間違える」(XXI-14)；

/bāḏat (Pf. 3 sg.f.)/ 「(卵を)産む」(XIX-72) ; /rawwaḥat (Pf. 3 sg.f.)/ 「行く」(IX-1) ;
/maṭṭarat (Pf. 3 sg.f.)/ 「雨が降る」(XVII-6) ; /χaḏet (Pf. 3 sg.f.)/ 「取る」(XIV-2) ;
/ğābet (Pf. 3 sg.f.)/ 「持って来る」(IX-23) ; /weṣlet (Pf. 3 sg.f.)/ 「着く」(IX-13)。

①-④にあげたような音声環境で広母音の /a/ が狭母音化される現象は、アラビア語の古典文法学の音声記述においてイマーラ (*'imāla*)⁴²⁾ とよばれた現象の一つである。若年層のあいだでは、標準アラビア語あるいはアラビア語カイロ方言の影響、あるいはその影響をうけた教養あるジバーリ・アラビア語話者の影響によって、上記の①-④における音声環境においても、[e]の代わりに[a]を使う傾向にある。

2.2.5 シュワー母音 [ə]

強勢のない開音節に生起する狭母音の /i/ と /u/, またまれには広母音の /a/ は、シュワー (schwa) 母音 (あいまい母音) の [ə] で現れることがある⁴³⁾。例: [yinzəlu (Impf. 3 pl.m.)] 「下りる」(XV-15) cf. /yinzil (Impf.)/ ; [yištəren (Impf. 3 pl.f.)] 「買う」(XII-4) cf. /yištiri (Impf.)/ ; [mdarrəsīn (pl.m.)] 「先生」(VIII-9) cf. /mdarris (sg.m.)/ ; [mraṣṣəsa (sg.f.)] 「寒い」(XVII-31) cf. /mraṣṣas (sg.m.)/。女性形語尾もシュワー母音となる場合がある。例: [magaššətən (du.)] 「ほうき」(V-30) cf. /magašše (sg.)⁴⁴⁾ ; [ħallətən (du.)] 「鍋, 釜」(V-10) cf. /ħalle (sg.)⁴⁵⁾。また、命令形等において語頭にくる(狭)母音に強勢がない場合、シュワー母音となる。例: [iktibi (Impr. sg.f.)] 「書く」(X-27) → [iktib ~ əktibi] cf. /iktib (Impr. sg.m.)/ ; /aχayye+i/ 「私の姉妹」(VII-26) → /aχayti/= [aχayti ~ əχayti]⁴⁶⁾。

日常のカジュアルな発話においては、このシュワー母音は聴覚的にはほとんど聞き取れなくなり、音声学的にはシュワー母音の脱落によって3子音クラスターとなる⁴⁷⁾。また、これらの3子音クラスターのなかで第1子音と第2子音が同じ子音である場合は、一つの子音が脱落する傾向にある。例: [fakkəru (Impr. pl.m.)] 「見る」(I-74) → [fakkru ~ fakru] cf. /fakker (Impr. sg.m.)⁴⁸⁾。また次例のように、シュワー母音を含む音節が完全に脱落する場合もある。例: [yrawwəḥu (Impf. pl.m.)] 「行く」(IX-1) → [yrawḥu] cf. /yrawwaḥ (Impf.)⁴⁹⁾ ; [mkalləde (sg.f.)] 「にぶい」(XX-4) → [mkalɗe] cf. /mkalled (sg.m.)/ ; [šgayyərīn (pl.m.)] 「小さい」(XX-15) → [šgayrīn] cf. /šgayyar (sg. diminutive)/ ; [mğayyəme (sg.f.)] 「曇った」(XVII-3) → [mğayme] cf. /mğayyem (sg.m.)/。この傾向は特に若い世代の発音に顕著に観察される。

強勢のない閉音節においても特にそれが語頭に来る場合、日常のカジュアルな発話

においては、シュワー母音の [ə] が現れることがある。例：/mismār/ 「釘」(V-21) → [mǝsmār]；/rawwāhtu (Pf. 2 pl.m.)/ 「行く」(IX-1) → [rāwwāhtu ~ rəwwāhtu] cf. /rawwāh (Impf.)/；/dawwart (Pf. 2 sg.m. ~ 1 sg.)/ 「捜す」(XIV-27) → [dāwwārt ~ dəwwārt]。

2.2.6 ジバーリ・アラビア語の短母音記述のための音声表記

以上のようなジバーリ・アラビア語の母音体系に関する議論と問題点を考慮して、ここでは比較方言学的な見地から可能な限り正確な言語データを提供するという意味からも、次の表に示すような母音体系を記述用として採用する。

表3 ジバーリ・アラビア語の短母音記述のための音声表記⁵⁰⁾

	前舌	中舌	後舌
狭母音	i		u
半狭母音	e	ə	o
半広母音	ɛ		
広母音		a	(ɑ)

2.2.7 長母音

ジバーリ・アラビア語における長母音の音素体系は以下の表に示す通りである。

表4 ジバーリ・アラビア語の長母音

	前舌	中舌	後舌
高 (狭母音)	ī		ū
中	ē	ō	
低 (広母音)		ā	

長母音を含んだ音節に強勢が落ちない場合は、各長母音は音声学的にはそれぞれに対応する短母音に近い長さの音声として現れる。

2.2.8 強勢 (アクセント)

語レベルのアクセントは強弱による強勢アクセントであり、標準アラビア語や他のアラビア語諸方言と同様に意味を区別する役割を持ってはいない。基本的な強勢規則は次のようになる。

閉音節 (ただし語末に来る閉音節は除く) または長母音を含んだ音節に強勢が落ち

る。例：/yistilif (Impf.)/ 「借りる」(XII-7) → [yistilif]；/yīngeleb (Impf.)/ 「負ける」(VI-42) → [yīngeleb]；/badri/ 「早い」(XXIII-14) → [bádri]⁵¹⁾。そのような音節が二つ以上ある場合には、語末に近い方の音節に強勢が落ちる⁵²⁾。例：/ḥamrā (sg.f.)/ 「赤い」(XX-30) → [ḥamrā]。強勢がない方の音節の長母音は音声的には（少なくとも日常のカジュアルな発話においては）短母音化される。例：[tiḫīnīn (pl.m.)] 「太った」(VI-7) ← /tiḫīn+īn/；[šāḡgālīn (pl.m.)] 「召使い」(VII-43) ← /šāḡgāl+īn/；[šebāt (pl.m.)] 「老人(男)」(VII-12) ← /šēb(ε)+āt/；[‘aḡuzāt (pl.f.)] 「老人(女)」(VII-12) ← /‘aḡūz+āt/。

長母音も閉音節（語末に来る閉音節は除く）も含まない語の場合は、最初の音節に強勢が置かれる。ただしその場合でも、語末の音節から数えて三番目を超えて強勢が置かれることはない。

2音節の例：/ḥama (sg.)/ 「義父」(VII-17) → [ḥúma]；/sama (sg.)/ 「空」(XVII-1) → [sáma]；/šabi (sg.)/ 「若い」(VII-13) → [šúbī]；/ḡani (sg.)/ 「金持ちの」(VIII-22) → [ḡáni]；/rigi (Pf.)/ 「上がる」(XV-13) → [rígi]；/ligi (Pf.)/ 「見つける」(XIV-28) → [lígi]；/simi‘ (Pf.)/ 「聞く」(I-76) → [sími‘]；/ṭele‘ (Pf.)/ 「上がる」(XV-13) → [ṭéle‘]；/enzil (Impr. sg.m.)/ 「下りる」(XV-15) → [énzil]。

3音節の例⁵³⁾：/šahāra (sg.)/ 「砂漠」(XVII-42) → [šáhāra]；/‘ašabi (sg.m.)/ 「乱暴な」(XXI-2) → [‘ášabi]；/aḥamar (sg.m.)/ 「赤い」(XX-30) → [áhamar]。

3音節以上の例：/aḫabaṭi (Impr. sg.f.)/ 「殴る、叩く」(XIII-11) → [aḫábaṭi]。

2.2.9 イマーラ

ある特定の音声環境において広母音 /a/ の調音位置が狭まって /i/ に近くなることを、アラブ古典文法学ではイマーラ（原義は「傾くこと」）と呼ぶ。広義には女性形語尾の音変化もイマーラに入るが、狭義には狭母音 /i/ あるいはその長母音 /ī/ の近隣にある音声環境における広母音 /a/（さらに長母音 /ā/）の音変化のことを指す。ここでは特に /C₁aC₂īC₃(a)/ の語構造における最初の /a/ の扱われ方が問題となる。

C₁ または C₂ の子音が、強調音（咽頭化音）、口蓋垂音 (/χ/, /ǧ/)、咽頭音 (/ħ/, /ʕ/), および /t/ の場合は、/a/ が保持される。例：/tanīb/ 「隣人」(VII-37)；/laṭīf/ 「優しい」(XXI-3)；/ḏa‘īf/ 「弱い」(XXI-12)；/naḏīf/ 「きれいな」(XXI-29)；/šadīḡ/ 「友達」(VII-36)；/šahīḥ/ 「正しい」(XXI-12)；/ḫafīf/ 「軽い」(XXIV-25)；/taḫīn/ 「厚い」(XX-26)；/ḡawīt/ 「深い」(XXII-21)；/šāḡīr/ 「小さい」(XX-15)；/ḥabīb/ 「恋人」(XVI-14)；/ḥalīb/ 「牛乳、ミルク」(III-27)；/atīḡ/ 「古い」(XXI-25)；/ba‘īd/ 「遠い」(XXII-17)⁵⁴⁾；/razīn/ 「優しい」(XXI-3)；/sarī‘/ 「速い」(IX-18)⁵⁵⁾。

上記の子音以外の音声環境においては、/i/ または /e/ となるか、脱落するかである。
/i/ になる場合の例：/yimīn/ 「右」(XXII-12)；/kibīr/ 「大きい」(XX-14)⁵⁶⁾；/simīn/ 「太い」(XX-24)；/kiθīr/ 「たくさんの、多くの」(XXIV-76)⁵⁷⁾。

/e/ になる場合の例：/gedīm/ 「古い」(XXI-25)；/gebīh/ 「醜い」(XXI-28)；/wesī/ 「広い」(XXII-23)⁵⁸⁾。

母音が脱落する例：/fgīr/ 「貧しい」(VIII-23)；/ḡmīl/ 「美しい」(XXI-27)；/θgīl/ 「重い」(XXIV-74)；/glīl/ 「少ない、少しの」(XXIV-77)⁵⁹⁾。

ジバリー・アラビア語では基本的にアクセントがない開音節の母音 /i/ あるいは /u/ は脱落するので、通時的には、C₁ または C₂ の子音が強調音（咽頭化音）、口蓋垂音 (/χ/, /ḡ/), 咽頭音 (/h/, /ʕ/) および /r/ の場合以外の音声環境においては、/a/ がイマールによって狭母音化した後に脱落したと考えられる。特記すべき点としては、若い人たちの発音においては、C₁ または C₂ の子音が強調音（咽頭化音）、口蓋垂音 (/χ/, /ḡ/), 咽頭音 (/h/, /ʕ/) および /r/ の場合でも、カイロ方言の影響からか母音が狭く調音される傾向にある。たとえば、/ṭawīl/ 「長い」(XX-22) / 「(背の) 高い」(XX-16) は、[ṭawīl ~ [tewīl] ~ [tiwīl] のような変異形として発音される。

2.2.10 音節構造

/#CCV-/: 語頭に二つの子音連続をもつ音節構造が可能である。例：/hyānan/ 「しばしば、時々」(XX-28) (<*/ahyānan/)；/lwān/ 「色 (pl.)」(<*/alwān/)；/sbū/ 「週」(XXIII-30) (<*/usbū/)；/ḡzīra/ 「島」(XXVII-58) (<*/ḡzīra/<*/ḡazīra/)。

/-CC#>/-CVC#: 語末の二つの子音連続は基本的に保持されているが、母音が挿入される場合もある。例：/wazen/ 「体重」(XX-19) (<*/wazn/) cf. /waznok/ 「あなたの体重」；/weḥeš/ 「悪い」(XXI-16) (<*/waḥš/) cf. /weḥše (sg.f.)⁶⁰⁾。

シュワー母音の脱落によって3子音クラスターが形成されることがあるが、その場合、音節の脱落現象が起きる（上記の2.2.5の説明を参照）。

3 形態論

3.1 代名詞

3.1.1 独立代名詞

ジバリー・アラビア語の独立代名詞は以下の通りである。

単数		複数	
1 c. 「私」	ana	1 c. 「私たち」	iḥna
2 m. 「あなた (男)」	inta	2 m. 「あなたたち (男)」	intu (~intow)
2 f. 「あなた (女)」	inti (~intey)	2 f. 「あなたたち (女)」	inten
3 m. 「彼」	hū (~hūwa)	3 m. 「彼ら」	hummo (~humma)
3 f. 「彼女」	hī (~hīye~hīya)	3 f. 「彼女ら」	henne

2 f. 「あなた (女)」: 文全体のなかで強調して発音される場合は、強勢が語末の方の母音に置かれ、[intéy] となる⁶¹⁾。

3 m. 「彼」: カイロ方言の影響で /hūwa/ も使われる⁶²⁾。

3 f. 「彼女」: カイロ方言の影響で /hīye~hīya/ も使われる⁶³⁾。

2 m. 「あなたたち (男)」: 文全体のなかで強調して発音される場合は、強勢が語末の方の母音に置かれ、[intów] となる⁶⁴⁾。

3 m. 「彼ら」: カイロ方言の影響で /humma/ も使われる⁶⁵⁾。

2 f. 「あなたたち (女)」・3 f. 「彼女ら」: 三人称複数形で男性と女性を区別する代名詞が使われるのは、バドウィン (遊牧民) 方言の特徴である。

3.1.2 接尾代名詞

ジバーリ・アラビア語の接尾代名詞は以下の通りである。

単数		複数	
1 c. 「私」 (名詞 +)	C+i (~ī) V+y (~yi)	1 c. 「私たち」	ne
	(動詞 +) ni (~nī)		
2 m. 「あなた (男)」	CV(C)+ku CC~v̄C+ok	2 m. 「あなたたち (男)」	kom
2 f. 「あなた (女)」	CV(C)+k CC~v̄C+ek	2 f. 「あなたたち (女)」	ken
3 m. 「彼」	C+o V+(h)	3 m. 「彼ら」	hom
3 f. 「彼女」	he	3 f. 「彼女ら」	hen

1 c. 「私」：名詞に接尾される代名詞は、子音に後接する場合と母音に後接する場合では異なる。子音の後ろでは /i (~ī)/ が、母音の後ろでは /y (~yi)/ が使われる⁶⁶⁾。例：/galam+i/ → /galami/ 「私のペン」；/bēt+i/ → /bēti/ 「私の家」；/a'la+y/ → /a'lāy/ 「私の上で」⁶⁷⁾。/ī/ や /nī/ は強勢が置かれて長母音化した場合である⁶⁸⁾。例：/galam+i/ → [gáлами ~ galamí] 「私のペン」；/ḡarab+ni/ → [ḡarábni ~ ḡarabní] 「彼が私をなぐった」。/yi/ は長母音に後接する場合に生起するが、/y/ の方が普通の形式である。例：/abu+y/ → [abūy ~ abūyi] 「私の父」⁶⁹⁾。

2 m. 「あなた (男)」：母音または閉音節の子音に後接する場合に、/ku/ が使われ、それ以外の音節の子音に後接する場合は、/ok/ が使われる⁷⁰⁾。例：/ḡarabku/ 「彼があなた (男) をなぐった」；/galamku/ 「あなた (男) のペン」；/a'lāku/ 「あなた (男) の上で」；/baṭnok/ 「あなた (男) の内側で」；/bētok/ 「あなた (男) の家」。子音に後接する /-ku/ の語末母音 /u/ は、日常のカジュアルな発話においてはシュワー母音化あるいは聴覚的には無母音に近くなる。音声学的には母音脱落の代償とも考えられるが、通常は軟口蓋で調音される /k/ の調音位置がいくぶん後ろよりになる聴覚印象を与える⁷¹⁾。また語末子音であるにもかかわらず、無声の無気音として現れるが、このことは次で述べるように、二人称単数女性形の接尾代名詞の /-k/ が強い帯気をもって発音されるのと関連する可能性がある。

2 f. 「あなた (女)」：母音または閉音節の子音に後接する場合に、/k/ が使われ、それ以外の音節の子音に後接する場合は、/ek/ が使われる⁷²⁾。例：/ḡarabk/ 「彼があなた (女) をなぐった」；/galamk/ 「あなた (女) のペン」；/a'lāk/ 「あなた (女) の上で」；/ḡarabtek/ 「私が (または、あなた (男) が) あなた (女) をなぐった」；/bētek/ 「あなた (女) の家」。/k/ は非常に強い帯気音とともに発音される。例：/ḡarabk/ → [ḡarabk^h]；/taḡatk/ → [taḡatk^h] (XXII-9)。有気/無気の対立はジバーリ・アラビア語の音韻論において弁別的ではないが、強調音 (咽頭化音) は余剰的な示差的特徴として無気性をもっており、同じ調音点の子音との弁別において二次的に関与している⁷³⁾。したがって、二人称単数男性形の接尾代名詞のところでも触れたように、母音または閉音節の子音に後接する音声環境において、音韻論的には /ku/ (2 m. 「あなた (男)」) vs. /k/ (2 f. 「あなた (女)」) の対立を想定したいが、音声学的には、前者が無気音で、後者が有気音として現れていると考えたい⁷⁴⁾。

3 m. 「彼」：子音に後接する場合と母音に後接する場合では異なり、まず子音の後ろでは /o/ が使われる⁷⁵⁾。例：/ḡarabo/ 「彼が彼をなぐった」；/galamo/ 「彼のペン」；bēto 「彼の家」。母音の後ろでは /h/ となるが、音声学的には接尾代名詞が後接する

ことにより、強勢移動が起り、当該の母音が長母音化される⁷⁶⁾。例：/ðarabtu+(h)/ → [ðarabtú(h)] (cf. ðarábtu) 「あなたたち（男）は彼をなぐった」；/kursi+(h)/ → [kursí(h)] (cf. kúrsi) 「彼のいす」。

3 f. 「彼女」：/he/ の母音は狭く発音される⁷⁷⁾。接続する単語の語末が2子音連続となっている場合、シュワー母音が入る。例：/ðarabhe/ 「彼が彼女をなぐった」；/galamhe/ 「彼女のペン」；/kursihe/ 「彼女のいす」；/ogbæhe/ 「彼女の後ろから」⁷⁸⁾。主として無声子音 /h/ に後接する場合、同化が起る。例：/taḥat+he/ → [taḥathe ~ taḥatte] 「彼女の下に」⁷⁹⁾；/šoḡlat+he/ → [šoḡlathē ~ šoḡlatte] 「彼女の（もの）」⁸⁰⁾。また前接の子音が咽頭音の /ʕ/ の場合は、相互に部分的な同化が起り、両子音ともに /h/ となる。例：/ma'+he/ → [maḥḥe ~ (ma'he)] 「彼女といっしょに」⁸¹⁾。

1 c. 「私たち」：/ne/ の母音は狭く発音される⁸²⁾。接続する単語の語末が2子音連続となっている場合、シュワー母音が入る。例：/ðarabne/ 「彼が私たちをなぐった」；/galamne/ 「私たちのペン」；/bētnē/ 「私たちの家」；/ogbæne/ 「私たちの後ろから」⁸³⁾。

2 m. 「あなたたち（男）」・2 f. 「あなたたち（女）」：女性複数形の接尾代名詞が存在するのは、ベドウィン方言の特徴である。/kom/ と /ken/ とともに、接続する単語の語末が2子音連続となっている場合、シュワー母音が入る⁸⁴⁾。例：/ðarabkom/ 「彼があなたたち（男）をなぐった」；/ðarabken/ 「彼があなたたち（女）をなぐった」；/galamkom/ 「あなたたち（男）のペン」；/galamken/ 「あなたたち（女）のペン」；/bētkom/ 「あなたたち（男）の家」；/bētken/ 「あなたたち（女）の家」；/ogbækom/ 「あなたたち（男）の後ろから」；/ogbæken/ 「あなたたち（女）の後ろから」⁸⁵⁾。

3 m. 「彼ら」・3 f. 「彼女ら」：女性複数形の接尾代名詞が存在するのは、ベドウィン方言の特徴である。/hom/ と /hen/ とともに、接続する単語の語末が2子音連続となっている場合、シュワー母音が入り、また /he/ の場合と同じように、前接する子音と /h/ 音が同化する傾向にある⁸⁶⁾。例：/ðarabhom/ 「彼が彼らをなぐった」；/ðarabhēn/ 「彼が彼女らをなぐった」；/galamhom/ 「彼らのペン」；/galamhēn/ 「彼女らのペン」；/bēttom/ 「彼らの家」；/bēttēn/ 「彼女らの家」；/ogbæhom/ 「彼らの後ろから」；/ogbæhēn/ 「彼女らの後ろから」；/maḥḥom/ 「彼らといっしょに」(← /ma'+hom/)；/maḥḥēn/ 「彼女らといっしょに」(← /ma'+hen/)⁸⁷⁾。

3.2 指示詞

3.2.1 指示代名詞

ジバーリ・アラビア語には、標準アラビア語（古典アラビア語）と同様、遠近の対

立による次のような指示代名詞がある。

単数形	男性形	女性形
近（これ）	ða (~ðe) ~ hāða (~hāðe)	ði ~ hāði
遠（あれ・それ）	ðāka ~ haðāka	ðīke ~ haðīke
複数形		
近（これら）	ðell ~ ðöl	ðellet
遠（あれら・それら）	ðallāka	ðallāket

近（これ）⁸⁸：通常の男性形は /ða/ だが、狭母音の /ðe/ が自由交替として現れることもある。女性形も通常は /ði/ だが、強勢が置かれるときには [ðéy]（音韻論的には /ðiy/）となる。無標の位置はカイロ方言と同じように修飾する名詞の後ろに置かれる。男性形の /hāða (~hāðe)/ および女性形の /hāði/ は、指示接頭辞の /ha~hā/ と当該の指示代名詞の複合形である⁸⁹。指示接頭辞のつかない形式、指示接頭辞の複合形による形式、指示接頭辞が分離された形式の、以下のような三種類の指示代名詞と名詞の表現が可能である。

- ① [定冠詞 + 名詞 + 指示代名詞（指示接頭辞なし）]⁹⁰
- ② [指示接頭辞つき指示代名詞 + 定冠詞 + 名詞]
- ③ [指示接頭辞 + 定冠詞 + 名詞 + 指示代名詞（指示接頭辞なし）]

男性形の例：① /iggalam ða/ 「このペン」；② /hāða ggalam/ 「このペン」；③ /haggalam ða/ 「このペン」。女性形の例：① /ilbint ði/ 「この娘」；② /hāði lbint/ 「この娘」；③ /halbint ði/ 「この娘」。

遠（あれ・それ）⁹¹：指示接頭辞の /ha~hā/ のつかない形とそれとの複合形がある⁹²。男性形の例：① /ilwalad ðāka/ 「あの少年」；② /haðāka lwalad/ 「あの少年」；③ /halwalad ðāka/ 「あの少年」。女性形の例：① /ilħorme ðīke/ 「あの女」；② /haðīke lħorme/ 「あの女」；③ /halħorme ðīke/ 「あの女」。

近（これら）⁹³：指示代名詞の複数形の場合に、男性形と女性形という性の区別があるのは、ジバーリ・アラビア語の特徴の一つである⁹⁴。男性形の場合、/ðell/ の方が本来のジバーリ・アラビア語の方言形と考えられる。/ðöl/ の方はおそらくカイロ方言の影響であり⁹⁵、若年層の話者で多用される。例：/lergāl ðell~ðöl/ 「これらの男たち」；/ilħarīm ðellet/ 「これらの女たち」⁹⁶。指示接頭辞の /ha~hā/ が先頭に置かれた構造も可能である。例：/halergāl ðell/ 「これらの男たち」；/halħarīm ðellet/ 「これらの

女たち」。

遠(あれら・それら)⁹⁷⁾：指示代名詞の複数形の場合に、男性形と女性形という性の区別があるのは、ジバリー・アラビア語の特徴の一つである⁹⁸⁾。男性形の例：*/lɛrgāl ðallāka/*「あれらの男たち」；*/ilbanāt ðallaket/*「あれらの娘たち」⁹⁹⁾。指示接頭辞の */ha~hā/* が先頭に置かれた構造も可能である。例：*/halɛrgāl ðallāka/*「これらの男たち」；*/halbanāt ðallaket/*「これらの女たち」。

指示代名詞の語順についてまとめると、次のようになる。

主語となる場合は文頭に置かれる。述部の名詞とは性と数で一致するが、複数の場合は単数形の指示代名詞が使われることもある。

例：*ðöl* *ɛrgāl*
these (pl.m.)-S *men (pl.m.)*
「これらは (= 男性複数形) 男たちです」
ðāka *wlād*
that (sg.m.)-S *boys (pl.m.)*
「あれは (= 男性単数形) 少年たちです」

先述したように指示代名詞が名詞を修飾する場合は、指示接頭辞の */ha~hā/* との組み合わせで①-③にあげたような3通りの語順が可能である。*/ðāka/* を例に可能な組み合わせを以下に示す。

- ① *ilwalad* *ðāka* [定冠詞 + 名詞 + 指示代名詞 (指示接頭辞なし)]¹⁰⁰⁾
the-boy *that*
- ② *haðāka* *lwalad* [指示接頭辞つき指示代名詞 + 定冠詞 + 名詞]
ha-that *the-boy*
- ③ *halwalad* *ðāka* [指示接頭辞+定冠詞+名詞+指示代名詞 (指示接頭辞なし)]
ha-the-boy *hat*

指示接頭辞の */ha~hā/* は常に先頭に置かれ、談話のなかで聞き手に特に注意をうながしたい部分を強調するという機能を持っており、後置された次のような表現は非文法的と判断される¹⁰¹⁾。

* *ilwalad* *haðāka*
the-boy *ha-that*

①の形式が最も無標な指示表現であり、③の形式は指示接頭辞の */ha~hā/* によって聞き手に注意を喚起したい場合に用いられる。②の形式については、指示代名詞が対

象とする人物あるいは物事に関して、話し手が何らかの（しばしば直接的な）知識または情報を有している場合（したがって聞き手はそのような知識または情報を有していないと話し手が判断した場合）に、聞き手の注意を喚起する強調的な指示表現として用いられる¹⁰²⁾。

例：haḏāka lwalad šufto imbāreh
ha-that the-boy-O saw-I-pro(O=the boy) yesterday
 「(ほら～ああ) あの少年なら、きのう私が(実際に)見ました」¹⁰³⁾

3.2.2 指示接頭辞 *ha*

指示接頭辞の /ha(～hā)/ は、指示代名詞に前接するだけでなく、普通名詞や固有名詞にも前接し、一般に聞き手と話し手のあいだでの情報のやりとりに関する談話機能を有している。例えば、ある一人の女性がやって来て今ここにいるという状況を想定した場合、次の文は最も無標の表現である。

例：① ḥorme hāḏra
woman-S present (sg.f.)¹⁰⁴⁾
 「(ある一人の) 女性が (今ここに) いる」

この場合、主語が後置された次のような文も可能である。特に後でみるように固有名詞が主語となる場合は、むしろこちらの方の語順が好まれる。

例：② hāḏra ḥorme
present (sg.f.) woman-S
 「(ある一人の) 女性が (今ここに) いる」

談話の中で話題化された特定の女性が主語となる場合は、次の例のように定冠詞のついた表現となる。

例：③ ilḥorme hāḏra
the-woman-S present (sg.f.)
 「その女性は (今ここに) いる」

指示接頭辞の /ha/ が名詞に付く場合、常に定冠詞を伴う。

例：④ halḥorme hāḏra
ha-the-woman-S present (sg.f.)
 「ほら、その女性なら (今ここに) いるよ」

①–③のような表現は主語が固有名詞の場合も同様になる。次の例のなかで、⑤が①または②に対応する最も無標の表現であり、⑥が③に対応し、主語のラビークが話

題化された文である。⑦は④に対応し、指示接頭辞の /ha/ が固有名詞に前接している。

- 例：⑤ hāḏer rabīʿ
 present (sg.m.) Rabīʿ-S
 「ラビーウが (今ここに) いる」
- ⑥ rabīʿ hāḏer
 Rabīʿ-S present (sg.m.)
 「ラビーウは (今ここに) いる」
- ⑦ harabīʿ hāḏer
 ha-Rabīʿ-S present (sg.m.)
 「ほら、ラビーウなら (今ここに) いるよ」

このような指示接頭辞の /ha/ が持つ基本的な機能は、実際の会話の状況において聞き手に注意を喚起するものである。定冠詞は談話のなかで前出したり、既知情報として存在する人物や事物を特定化する機能をもっており、話題化という統語現象は既知情報の部分と新情報の部分を統語的に明示する機能をもっていると言えるが、必ずしも話し手と聞き手の会話状況を明示的に要求するものではない。指示接頭辞の /ha/ は、話し手にとっては談話のなかで特定化される人物や事物を聞き手にも注意を喚起することで、談話を進行させるために必要となる関連情報を聞き手と共有するように促す機能がある¹⁰⁵⁾。したがって、先に指示代名詞における指示接頭辞の機能について議論したように、聞き手を想定した談話のなかで、話し手が何らかの(しばしば直接的な)知識または情報を有している場合(したがって聞き手はそのような知識または情報を有していないと話し手が判断した場合)に、指示接頭辞の /ha/ が聞き手の注意を喚起する強調的な指示表現として用いられる。

上の例の④と⑦は前後の談話構造のない単独の文なので、単に聞き手に対して注意を喚起している文とも解釈できるし、話し手と聞き手のあいだですでに特定化され共有されている人物に関連して、話し手が直接的に見聞した確かな情報を聞き手にこれから与えることを強調的に明示する文とも解釈できる。つまり、④や⑦の文では、その女性やラビーウがやって来るかもしれないという情報は、話し手と聞き手のあいだで共有されており、話し手は実際にその女性あるいはラビーウがやって来てそこにいるのを確認したが、聞き手の方はまだ確認できていないと話し手が判断する状況において、話し手がその当該の人物に指示接頭辞の /ha/ を付けることで、話題となっている人物に話し手が聞き手にはない情報を所有していることを明示しているのである。

「誰かがそこにやって来ている」かも知れないという情報を話し手と聞き手が共有している場合は、次のような文も可能である。

例：⑧ halhāḏra ḥorme
 ha-the-present (sg.f.) woman-S
 「ほら（今ここに）いるのは、女性だよ」¹⁰⁶⁾

⑨ halhāḏer rabīʿ
 ha-the-present (sg.m.) Rabīʿ-S
 「ほら（今ここに）いるのは、ラビーウだよ」

⑧の文では、男性と女性のどちらかが来るという情報を話し手と聞き手がすでに共有しており、実際に来ているのが女性ということを話し手が確認した場合であり、男性ではないという含意がある。また⑨の文では、ラビーウを含めたグループがやって来るという情報をやはり話し手と聞き手が共有しており、実際に来ているのはラビーウということを話し手が確認した場合であり、しばしば言外にラビーウだけしかいないという含意もある。

ここで注意したいのは、このような指示接頭辞の機能は大方において文頭に来る名詞等に接頭される場合が普通であり、以下のような文は非文法的になる。

例：⑩ *ḥorme halhāḏra
 woman-S ha-the-present (sg.f.)

ただし、⑩のような文が話題化された文として、⑫の文は可能である。

例：⑪ halhāḏra (i)ḥorme
 ha-the-present (sg.f.) the-woman-S
 「ほら（今ここに）いるのは、その女性だよ」

⑫ ilḥorme halhāḏra
 the-woman-T (=S) ha-the-present (sg.f.)
 「その女性なら、ほら（今ここに）いるよ」¹⁰⁷⁾

3.2.3 指示副詞

ジバーリ・アラビア語の場所を表わす指示詞は、カイロ方言などの他のアラビア語方言だけでなく、標準アラビア語や古典アラビア語にも在証されない、特殊な形式を持っている。以下、ジバーリ・アラビア語 (JA) カイロ方言 (CA)、現代標準アラビア語 (MSA) の形式をあげる。

表5 近称の指示詞

JA	CA	MSA
heni ¹⁰⁸⁾	hena	hunā
nhāni ¹⁰⁹⁾		

表6 遠称の指示詞

JA	CA	MSA
henōt (~hnāk) ¹¹⁰⁾	henāk	hunāka

話し手の近くを指す場合、「手の届く範囲」にある比較的近い場所を示す /nhāni/ という単語と、もう少し離れた場所を示す /heni/ という単語を使い分ける。遠くの場所を示す指示詞は /henōt/ の一つだけである。ジバーリ・アラビア語では話し手を中心に空間を三分割すると言える¹¹¹⁾。

3.3 疑問詞

ジバーリ・アラビア語の疑問詞は以下の通りである。

誰 (who, whom) :	mīn
何 (what) :	ēš ~ ē
なぜ (why) :	lēš ~ lē
どこ (where) :	wēn (~ fēn)
いつ (when) :	mitēn (~ imta)
どのように (how) :	kēf (~ izzay)
どれ, どの (which) :	ayyu
いくつ (how many) :	kam
いくら (how much) :	bkam
どのくらい (how far, how long) :	gaddēš ~ gadr ēš

誰 (who, whom)¹¹²⁾ : /mīn/ はカイロ方言と同じようにジバーリ・アラビア語でも語順が文頭に移動しない Wh-in-situ 疑問文である¹¹³⁾。

例 : mīn ḡarabku
 who (=S) struck-you (sg.m.)-O
 「誰があなた (男) をなぐったか？」¹¹⁴⁾

inta řarabt mīn
 you (sg.m)-S struck whom (=O)

「あなた(男)は誰をなぐったか？」

また、次の例文のように、疑問詞を焦点化し文頭へ移動させた Wh-in-comp 疑問文も可能である¹¹⁵⁾。

例：mīn illi řarabku
 who (=S) rel. struck-you (sg.m.)-O
 「あなた(男)をなぐったのは、誰か？」
 mīn illi řarabto
 whom (=O) rel. you-S-struck-him (=whom)-O
 「あなた(男)がなぐったのは、誰か？」

何(what)¹¹⁶⁾：/eš/ が通常使われる形式で、/ē/ もカイロ方言の影響から頻繁に使われるようになってきている。/eš/ は、疑問詞が移動しない Wh-in-situ 疑問文としても、文頭へ移動する Wh-in-comp 疑問文としても生起可能である。

例：btākul ēš
 progressive-eat-you (sg.m.)-S what (=O)
 「あなた(男)は何を食べているか？」
 ēš btākul
 what (=O) progressive-eat-you (sg.m.)-S
 「何をあなた(男)は食べているか？」

しかしながら、疑問詞の /eš/ が文頭へ移動する場合、通常は /eš/ の後に三人称の独立代名詞が連辞的に挿入され、次の例にあるように疑問詞とのあいだで複合的短縮形が生起する¹¹⁷⁾。

例：eššū btāklo (cf. /eššū/ ← /ēš+hū/)
 what (=O)-he progressive-eat-you (sg.m.)-S-O (=what)
 「あなた(男)が食べているのは、何か？」

/eš/ に後接する三人称の独立代名詞は基本的に数と性において後続する文の主語に文法的に一致する。上記の例文では、後続の文の主語(動詞未完了形の活用形として明示されている)が二人称単数男性なので、単数・男性の三人称の独立代名詞である /hū/ が選択されている。以下に他の例をあげる。

例：eššī btākli(h) (cf. /eššī/ ← /ēš+hī/)
 what (=O)-she progressive-eat-you (sg.f.)-S-O (=what)

「あなた(女)が食べているのは、何か？」

ただし後続の文の主語が複数の場合は、代名詞の独立形ではなく、接尾形が用いられる¹¹⁸⁾。

例： eššom btāklū(h) (cf. /eššom/ ← /ēš+hom/)

what (=O)-their (m.) progressive-eat-you (pl.m.)-S-O (=what)

「あなたたち(男)が食べているのは、何か？」

eššen btāklenno (cf. /eššen/ ← /ēš+hen/)

what (=O)-their (f.) progressive-eat-you (pl.m.)-S-O (=what)

「あなたたち(女)が食べているのは、何か？」

上記の例のように後続の文の主語が複数の場合、数によって一致せずに単数の独立代名詞による /eššū/ や /eššī/ を使うことが多い。

例： eššū btāklū(h)

what (=O)-he progressive-eat-you (pl.m.)-S-O (=what)

eššī btāklenno

what (=O)-she progressive-eat-you (pl.m.)-S-O (=what)

/eššū/ や /eššī/ は単独でも使える。

例： eššū

what-he (~it)

「いったい、それ(彼)は何だ？」

eššī

what-she (~it)

「いったい、それ(彼女)は何だ？」

/eššū/ や /eššī/ は基本的に文頭にしか生起せず、後置された文は非文法的になる。

例： * btākul eššū

progressive-eat-you (sg.m.) what (-O)-he

ただし、指示代名詞といっしょに使われる場合は語順が逆転することがある。

例： eššū ḏa

what-he this

「いったい、これは何だ？」¹¹⁹⁾

ḏaššū

this-what-he

「いったい何だ、これは？」

なぜ (why)¹²⁰⁾ : /lēs/ が通常使われる形式で, /lē/ もカイロ方言の影響から頻繁に使われるようになってきている。/lēs/ は文末あるいは文頭でも生起可能である¹²¹⁾。

例 : inta taḏḥak lēs
 you (sg.m.)-S laugh (Impf. 2 sg.m.) why
 「あなた (男) はなぜ笑っているのか？」
 lēs inta taḏḥak
 why you (sg.m.)-S laugh (Impf. 2 sg.m.)
 「なぜ, あなた (男) は笑っているのか？」

疑問詞の /lēs/ が文頭へ移動する場合, 通常は /lēs/ の後に三人称の独立代名詞が連辞的に挿入される。しかしながら, 先述の /ēš/ の場合と少し異なり, 連辞的に挿入される三人称の独立代名詞と疑問詞の /lēs/ が複合的に短縮化されることはない。また /lēs/ の場合, 挿入される独立代名詞は単数形の形のみで, 後続の文の主語と性でのみ文法的に一致する。

例 : lēs hū mabtakuš
 why he not-progressive-eat (Impf. 2 sg.m.)
 「なぜ, あなた (男) は食べていないのか？」
 lēs hū mabtaklūš
 why he not-progressive-eat (Impf. 2 pl.m.)
 「なぜ, あなたたち (男) は食べていないのか？」
 lēs hī mabtaklīš
 why she not-progressive-eat (Impf. 2 sg.f.)
 「なぜ, あなた (女) は食べていないのか？」
 lēs hī mabtaklenš
 why she not-progressive-eat (Impf. 2 pl.f.)
 「なぜ, あなたたち (女) は食べていないのか？」

どこ (where)¹²²⁾ : /wēn/ が通常用いられる疑問詞で, /fēn/ はカイロ方言あるいは都市部の教養あるアラビア語を意識して用いるような場合に用いられる。/wēn/ は文末で使われるのが普通である。

例 : tuskun wēn
 live (Impf. 2 sg.m.) where
 「あなた (男) はどこに住んでいるか？」

前置詞 /min/ 「～から」と共起することもできる。

例： ḡīt min wēn
 come (Pf. 2 sg.m.) from where

「あなた (男) はどこから来たか？」¹²³⁾

いつ (when)¹²⁴⁾ : /mitēn/ が通常用いられる疑問詞で, /imta/ はカイロ方言あるいは都市部の教養あるアラビア語を意識して用いるような場合に用いられる。

どのように (how)¹²⁵⁾ : /kēf/ が通常用いられる疑問詞で, /izzay/ はカイロ方言あるいは都市部の教養あるアラビア語を意識して用いるような場合に用いられる¹²⁶⁾。
/kēf/ は通常文頭に用いられるが, 動詞の直後でも可能である。

例： kēf tsawwi šāy
 how make (Impf. 2 sg.m.) tea-O

「どうやってお茶をいれるか？」¹²⁷⁾

tsawwi kēf šāy
 make (Impf. 2 sg.m.) how tea-O

「お茶をどうやっていたか？」

どれ, どの (which)¹²⁸⁾ : /ayyu/ には単数名詞が後続する。

例： ayyu lōn biḥibb
 which color habitual-like (Impf. sg.m.)

「どの色があなた (男) は好きか？」

いくつ (how many)¹²⁹⁾ : /kam/ には名詞の単数形が後続する。

いくら (how much)¹³⁰⁾ : /bkam/ が /ða/ と使われるとき, /ēš/ の場合と同様に語順が逆転することがある。例： ḏa bkam ~ bkam ḏa 「これはいくらか？」

どのくらい (how far, how long)¹³¹⁾ : /gaddēš/ が通常の形式で, /gadr ēš/ は文語表現に影響を受けた形式である。文頭に用いられるのが普通である。例： gaddēš waznok 「あなたの体重はどのくらいか？」

3.4 名詞

3.4.1 女性形語尾 (*tā' marbūṭa*)

女性形語尾は, 強調音 (咽頭化音), 口蓋垂音 (/χ/, /ǧ/), 咽頭音 (/h/, /ʕ/), および /r/ の後に来る場合は, /-a/ ([-a] ~ [-ɑ]) となり, それ以外の音声環境では /-e/ となる。前者の場合の例: [tarḥa] 「ペール」 (II-8); [gottɑ] 「猫」 (XIX-9); [bagara] 「牛」 (XIX-11)。後者の場合の例: [gimme] 「山頂」 (XVII-37); [dise] 「森」 (XVII-41); [barke] 「池, 湖」 (XVII-43)。また, 後続の名詞あるいは接尾代名詞による所有表現

(いわゆるイダーファ)の場合、上記の音声環境で[-at]となる場合以外は、語末の女性形-εは[-et]～[-et]～[-t]で現れる¹³²⁾。例：/ǧedde/「祖母」/ǧeddethe/←/ǧedde+he/ (VII-20)；/siddāne/「ひたい」/siddānto/←/siddānet+o/「彼のひたい」(I-5)。

3.4.2 双数形

ジバーリ・アラビア語では双数形が残存している。双数形語尾は/-ēn/である。例：/ēnēn~enēn/ (I-6)「二つの目」；/ḥaǧbēn/ (I-7)「二つの眉」。しかしながら実際に二つのものを数える場合には、複数形と数詞を組み合わせたのが普通である¹³³⁾。例：/yūn θentēn/ (I-6)「二つの目」。このような特徴はジバーリ・アラビア語に独特のものである。

女性形語尾が双数形になるとき、直前の音節が開音節の場合は女性形語尾の母音が脱落する。例：/farāše/「ちょう」/faraštēn/←/farāšet+ēn/ (XIX-45)¹³⁴⁾。それ以外の場合は、母音が保持されるか、シュワー母音[ə]となる。例：/naǧ'a/「翼」/naǧ'atēn/←/naǧ'at+ēn/；/ḥalle/「鍋、釜」/ḥallotēn/←/ḥallet+ēn/。

3.4.3 複数形

男性名詞および女性名詞の規則複数形は、それぞれ/-īn/および/-āt/の語尾によって形成される。男性名詞の規則複数形の例：/naǧǧār (sg.m.)/→/naǧǧārīn (pl.m.)/「大工」(VIII-38)。女性名詞規則複数形の例：/šubbābe (sg.f.)/→/šubbabāt (pl.f.)/「笛」(XI-9)。

C₁āC₂iの語構成の場合、語末母音が長母音化されて規則複数形となる。例：/āli (sg.m.)/→/ālīn (pl.m.)/「高い」(XXII-19)；/wāṭi (sg.m.)/→/wāṭīn (pl.m.)/「低い」(XXII-20)¹³⁵⁾。

ジバーリ・アラビア語に特徴的な複数形として、一部の名詞に見られる大複数形がある。たとえば、/bint/「少女、(女の)子供」(VII-8)には通常の複数形である/banāt/の他に、数が多い場合に使われる/bnette/という大複数形がある。基本的に大複数形は、/C₁C₂eC₃C₃a/の語構成パターンをとる¹³⁶⁾。また、このような大複数形が可能な語彙はかなり限定されており、人間に関わる名詞がほとんどである¹³⁷⁾。例：/walad (sg.)/→/wledde ~ wlād (pl.)/「少年、(男の)子供」(VII-7)。

3.5 動詞

3.5.1 強動詞の完了形

語根子音が強子音の場合、ジバーリ・アラビア語の動詞の完了形は語幹母音によっ

て、 $C_1aC_2aC_3$ と $C_1iC_2iC_3$ (あるいは $C_1eC_2eC_3$) と $C_1uC_2uC_3$ (あるいは $C_1oC_2oC_3$) の三つのパターンに分けられる。最初のパターンの動詞が最も多く、次に2番目、3番目となる。ただし、3番目のパターンの動詞の場合、実際には母音が /o/ となる $C_1oC_2oC_3$ のみが在証される。

完了形が $C_1aC_2aC_3$ のパターンを取る動詞の活用は以下ようになる。

例：ḡarab (Pf.) 「毆る、叩く」(XIII-11)

Pf.	sg.	pl.
3 m.	ḡarab	ḡarabu
3 f.	ḡarabet	ḡaraben
2 m.	ḡarabt	ḡarabtu
2 f.	ḡarabti	ḡarabten
1	ḡarabt	ḡarabne

次に完了形が $C_1iC_2iC_3$ (あるいは $C_1eC_2eC_3$) のパターンを取る動詞の活用は以下のようにになる。

例：li‘ib (Pf.) 「遊ぶ」(XI-1)

Pf.	sg.	pl.
3 m.	li‘ib	li‘bu
3 f.	li‘bet	li‘ben
2 m.	l‘ibt	l‘ibtu
2 f.	l‘ibti	l‘ibten
1	l‘ibt	l‘ibne

例：rekeb (Pf.) 「乗る」(IX-21)

Pf.	sg.	pl.
3 m.	rekeb	rekbu
3 f.	rekbet	rekben
2 m.	rkebt	rkebtu
2 f.	rkebti	rkebten
1	rkebt	rkebne

上の例からわかるように、 $C_1iC_2iC_3$ (あるいは $C_1eC_2eC_3$) パターンの動詞の完了形の活用形において、強勢が落ちない母音が脱落する。たとえば、/li‘ib/ の三人称単数女性形の場合、/li‘ibet/ → [li‘bet] のように真ん中の母音が脱落するし、同じく二人称単数男性形の場合、/li‘ibt/ → [l‘ibt] のように最初の母音が脱落する。ただし次の例に

あるように、*gahawa* シンドロームと同じ子音構成の場合は、母音脱落が起らない¹³⁸⁾。

例：*ġelet* (Pf.) 「間違える」(XXI-14)

Pf.	sg.	pl.
3 m.	<i>ġelet</i>	<i>ġeltu</i>
3 f.	<i>ġeltat</i>	<i>ġelten</i>
2 m.	<i>ġelett</i>	<i>ġelett</i>
2 f.	<i>ġelett</i>	<i>ġelett</i>
1	<i>ġelett</i>	<i>ġelett</i>

$C_1aC_2aC_3$ と $C_1iC_2iC_3$ の両方のパターンを持つ動詞が存在するが、基本的に前者の場合がより古いパターンであり、後者の方は、カイロ方言に影響を受けて若年層がよく使うパターンである場合が多い。例：*/ðəħək ~ ðeħek* (Pf.)/ 「笑う」(I-77)；*/nazal ~ nizil* (Pf.)/ 「下りる」(XV-15)；*/faham ~ fiħim* (Pf.)/ 「わかる」(XVI-3)。たとえば、*/nazal ~ nizil* (Pf.)/ の場合の活用は以下のように相違する。

例：*nazal ~ nizil* (Pf.) 「下りる」(XV-15)

Pf.	sg.	pl.	Pf.	sg.	pl.
3 m.	<i>nazal</i>	<i>nazalu</i>	3 m.	<i>nizil</i>	<i>nizlu</i>
3 f.	<i>nazalet</i>	<i>nazalen</i>	3 f.	<i>nizlet</i>	<i>nizlen</i>
2 m.	<i>nazalt</i>	<i>nazaltu</i>	2 m.	<i>nzilt</i>	<i>nziltu</i>
2 f.	<i>nazalti</i>	<i>nazalten</i>	2 f.	<i>nzilti</i>	<i>nzilt</i>
1	<i>nazalt</i>	<i>nazalne</i>	1	<i>nzilt</i>	<i>nzinne</i>

次に完了形が $C_1uC_2uC_3$ (あるいは $C_1oC_2oC_3$) のパターンを取る動詞の活用は以下のようになる。 $C_1iC_2iC_3$ (あるいは $C_1eC_2eC_3$) パターンの場合と同じく、 $C_1uC_2uC_3$ (あるいは $C_1oC_2oC_3$) パターンの場合も強勢のない母音が脱落する。

例：*šoġor* (Pf.) 「小さくなる」(XX-15)

Pf.	sg.	pl.
3 m.	<i>šoġor</i>	<i>šoġru</i>
3 f.	<i>šoġrat</i>	<i>šoġren</i>
2 m.	<i>šġort</i>	<i>šġortu</i>
2 f.	<i>šġorti</i>	<i>šġorten</i>
1	<i>šġort</i>	<i>šġorne</i>

$C_1uC_2uC_3$ (あるいは $C_1oC_2oC_3$) パターンに属する動詞は極めて少なく、すべての動詞が語根子音に強調音(咽頭化音)、口蓋垂音(/ħ/, /ġ/), および /r/ のいずれかを含

んでいる¹³⁹⁾。したがって、音声的には短母音 /u/ が常に後舌半狭母音 [o] として現れる場合だけに限られていると言える。例：/rozog (Pf.)/ 「子供を授かる」(VI-2)¹⁴⁰⁾。また、このパターンの動詞のいくつかは、カイロ方言の影響と考えられる C₁iC₂iC₃ (あるいは C₁eC₂eC₃) パターンの活用形をもっており、若年層において多用される傾向にある。例：/χoloṣ ~ χiliṣ (Pf.)/ 「終わる」(XV-4)；/koroh ~ kereh (Pf.)/ 「嫌う」(XVI-15)。

3.5.2 強動詞の未完了形

未完了形の活用パターンは、接頭辞の母音と語幹母音の組み合わせによって、次のような三つに分かれる。

① 接頭辞母音 /a/ と語幹母音 /a/ のパターン

例：yafham (Impf.) 「わかる」(XVI-3)

Impf.	sg.	pl.
3 m.	yafham	yafhamu
3 f.	tafham	yafhamen
2 m.	tafham	tafhamu
2 f.	tafhami	tafhamen
1	afham	nafham

② 接頭辞母音 /i/ と語幹母音 /i/ のパターン¹⁴¹⁾

例：yinzil (Impf.) 「下りる」(XV-15)

Impf.	sg.	pl.
3 m.	yinzil	yinzəlu
3 f.	tinzil	yinzəlen
2 m.	tinzil	tinzəlu
2 f.	tinzəli	tinzəlen
1	enzil ~ anzil	ninzil

③ 接頭辞母音 /u/ と語幹母音 /u/ のパターン¹⁴²⁾

例：yoḏrob (Impf.) 「殴る, 叩く」(XIII-11)

Impf.	sg.	pl.
3 m.	yoḏrob	yoḏrobu
3 f.	toḏrob	yoḏroben
2 m.	toḏrob	toḏrobu
2 f.	toḏrobi	toḏroben

1 oğrob ~ ağrob noğrob

ジバリー・アラビア語に見られる①-③のような接頭辞母音と語幹母音の母音調和による未完了形の形成パターンは、いわゆる「北西アラビア半島方言 (North-west Arabian Dialects)」と総称される方言群のなかの特に西部グループに共通する特徴である¹⁴³⁾。①のパターンに属する動詞が最も多く、次いで③のパターンで、②のパターンは比較的少ない¹⁴⁴⁾。①-③の母音調和によるパターンの例外となる動詞の未完了形もあるが、接頭辞母音 /a/ と語幹母音 /i/ の組み合わせか、接頭辞母音 /i/ と語幹母音 /a/ の組み合わせであり、③のパターンつまり接頭辞が /u/ の場合の例外は確認されない。

接頭辞母音 /a/ と語幹母音 /i/ の例：/yidfin ~ yadfin (Impf.)/ 「葬る」(VI-27)；/yinsiğ ~ yansiğ (Impf.)/ 「織る」(VIII-53)；/ya'zig (Impf.)/ 「耕す」(VIII-46)；/ya'zim (Impf.)/ 「招く」(XIII-21)；/ya'ser (Impf.)/ 「絞る，しめつける」(XIV-17)¹⁴⁵⁾；/ya'ged (Impf.)/ 「結ぶ」(XIV-44)；/ya'ref (Impf.)/ 「知る，知っている」(XVI-2)。

接頭辞母音 /i/ と語幹母音 /a/ の例：/yizħaf (Impf.)/ 「這う」(IX-20)¹⁴⁶⁾。

ジバリー・アラビア語にきわだった特徴となっているのが、一人称単数形の接頭辞母音である。通常は、上記の活用例中の /afham/ のように /a-/ が基本形であるが、語幹母音が /u/ ([u] ~ [o]) あるいは /i/ ([i] ~ [e]) の場合に、基本形の /a-/ 以外に語幹母音と母音調和を起こした母音を持つ接頭辞の活用形が使われる。上の例にある /enzil ~ anzil/, /oğrob ~ ağrob/ のような強子音動詞の場合だけでなく、弱子音動詞や派生形動詞の場合も同じである¹⁴⁷⁾。例：/ebī' (Impf. 1 sg.)/ cf. /bā' (Pf.)/ /ybī' (Impf.)/ 「売る」(XII-3)；/ermi (Impf. 1 sg.)/ cf. /rame (Pf.)/ /yirmi (Impf.)/ 「投げる」(XIV-6)；/eddi (Impf. 1 sg.)/ cf. /adde (Pf.)/ /yiddi (Impf.)/ 「与える」(XII-1)；/eštiri (Impf. 1 sg.)/ cf. /štara (Pf.)/ /yištiri (Impf.)/ 「買う」(XII-4)；/ogül (Impf. 1 sg.)/ cf. /gāl (Pf.)/ /ygül (Impf.)/ 「言う」(X-6)；/omorr (Impf. 1 sg.)/ cf. /marr (Pf.)/ /ymorr (Impf.)/ 「通る」(IX-26)¹⁴⁸⁾。

第1語根の子音が *gahawa* シンドロームを起こす場合、接頭辞母音は常に /a/ となる。またこの場合、語幹母音は /a/ または /i/ (/e/ も含む) となる¹⁴⁹⁾。例：/yaħaħaf (Impf.)/ 「つかむ」(XIV-4) ← /*yaħaħaf (Impf.)/；/yağalib (Impf.)/ 「勝つ」(VI-41) ← /*yağlib (Impf.)/；/yaħafer (Impf.)/ 「掘る」(XIV-55) ← /*yaħfer (Impf.)/。強勢は、*gahawa* シンドロームによって挿入された母音の /a/ に落ちるが、語幹母音の /i/ (~e/) は開音節になる場合には脱落する。例：/byahamdo/ ← /b+yahamed+o/ cf. /yahamed (Impf.)/ 「押える」(XIV-14)。また、第1語根の子音が /'/ の場合は、接頭辞母音が脱落することがある。例：/y'arag (Impf.)/ 「汗をかく」(I-67)；/y'aşer (Impf.)/ 「絞る，し

めつける」(XIV-17)¹⁵⁰；/yˈaʦos (Impf.)/「くしゃみする」(I-22)¹⁵¹。

完了形の語幹母音のパターンと、未完了形の接頭辞母音および語幹母音のパターンの間には、基本的に次のような組み合わせが設定される¹⁵²。

- ① 完了形 C₁aC₂aC₃ → 未完了形 yaC₁C₂aC₃
- ② 完了形 C₁aC₂aC₃ → 未完了形 yiC₁C₂iC₃
- ③ 完了形 C₁aC₂aC₃ → 未完了形 yuC₁C₂uC₃
- ④ 完了形 C₁iC₂iC₃ → 未完了形 yaC₁C₂aC₃
- ⑤ 完了形 C₁uC₂uC₃ → 未完了形 yuC₁C₂uC₃

完了形 C₁aC₂aC₃のパターンが対応する未完了形のパターンは、yaC₁C₂aC₃, yiC₁C₂iC₃, yuC₁C₂uC₃のいずれかとなるが⁵, 語根子音の音声環境によって以下のような傾向がみとめられる。

①の組み合わせ：第2語根子音あるいは第3語根子音が、咽頭摩擦音の/h/または/v/の場合、未完了形の接頭辞母音と語幹母音が/a/となる傾向にある¹⁵³。例：/saħab (Pf.)/ → /yashaħ (Impf.)/「引っ張る」(XIV-15)；/sarah (Pf.)/ → /yasarah (Impf.)/「飼育する, 放牧する」(VIII-43)¹⁵⁴；/baˈat (Pf.)/ → /yabaˈat (Impf.)/「送る」(XII-9)；/manaˈ (Pf.)/ → /yamaˈ (Impf.)/「禁じる」(XIII-17)¹⁵⁵。

②の組み合わせ：①と③の組み合わせとなる場合以外の音声環境においては、未完了形の接頭辞母音と語幹母音が/i/となる傾向にある¹⁵⁶。例：/katab (Pf.)/ → /yiktib (Impf.)/「書く」(X-27)；/kasar (Pf.)/ → /yikser (Impf.)/「こわす」(XIV-38)。

③の組み合わせ：第2語根子音あるいは第3語根子音が、強調音(咽頭化音), 口蓋垂音 (/χ/, /ǧ/), および/r/の場合、未完了形の接頭辞母音と語幹母音が/u/となる傾向にある¹⁵⁷。例：/faṣal (Pf.)/ → /yufaṣol (Impf.)/「離す, 引き離す」(XIV-50)；/rabaṭ (Pf.)/ → /yorboṭ (Impf.)/「結ぶ」(XIV-44)；/ṭabaḫ (Pf.)/ → /yoṭboḫ (Impf.)/「料理する」(III-37)；/ṣabaġ (Pf.)/ → /yoṣboġ (Impf.)/「染める」(XX-37)；/χaraġ (Pf.)/ → /yoχroġ (Impf.)/「出る」(IX-7)；/baḏar (Pf.)/ → /yubḏor (Impf.)/「蒔く」(VIII-47)。また, 第1語根子音が強調音(咽頭化音)および/r/となるときも, 接頭辞母音と語幹母音が/u/となる傾向が強い¹⁵⁸。例：/ṭalab (Pf.)/ → /yoṭlob (Impf.)/「頼む」(XIII-14)；/ṣamat (Pf.)/ → /yoṣmot (Impf.)/「黙る」(X-7)；/raṣaf (Pf.)/ → /yorṣof (Impf.)/「吸う」(III-49)¹⁵⁹。

④の組み合わせ：完了形 C₁iC₂iC₃のパターンは, 基本的に未完了形 yaC₁C₂aC₃に対応している¹⁶⁰。例：/libis (Pf.)/ → /yalbas (Impf.)/「着る」(II-2)；/ṭeleˈ (Pf.)/ → /yaṭlaˈ (Impf.)/「上がる」(XV-13)¹⁶¹。

⑤の組み合わせ：完了形 C₁uC₂uC₃のパターンは, 基本的に未完了形 yuC₁C₂uC₃に

対応している。例：/şoğor (Pf.) / → /yoşğor (Impf.) / 「小さくなる」 (XX-15)¹⁶²⁾。

3.5.3 強動詞の命令形

強動詞の命令形は、未完了形と同じ接頭辞母音と語幹母音の組み合わせから形成される。

- ① 未完了形が接頭辞母音 /a/ と語幹母音 /a/ のパターン

例：faham (Pf.) / yafham (Impf.) 「わかる」 (XVI-3)

Impr.	sg.	pl.
m.	afham	afhamu
f.	afhami	afhamen

例：libis (Pf.) / yalbas (Impf.) 「着る」 (II-2)

Impr.	sg.	pl.
m.	albas	albasu
f.	albasi	albasen

- ② 未完了形が接頭辞母音 /i/ と語幹母音 /i/ のパターン

例：nazal ~ nizil (Pf.) / yinzil (Impf.) 「下りる」 (XV-15)

Impr.	sg.	pl.
m.	enzil	enzəlu
f.	enzəli	enzəlen

例：katab (Pf.) / yiktib (Impf.) 「書く」 (X-27)

Impr.	sg.	pl.
m.	iktib	iktibu
f.	iktibi	iktiben

- ③ 未完了形が接頭辞母音 /u/ と語幹母音 /u/ のパターン

例：yođrob (Impf.) 「殴る, 叩く」 (XIII-11)

Impr.	sg.	pl.
m.	ođrob	ođrobu
f.	ođrobi	ođroben

通常は強勢が最初の母音に置かれるが (例：[énzil]), 後ろの音節に置かれることもある (例：[iktíb])¹⁶³⁾。

gahawa シンドロームとなる場合の命令形は以下ようになる。

例：χabaṭ (Pf.) / yaχabaṭ (Impf.) 「叩く」 (XIII-11)

Impr.	sg.	pl.
m.	aḫabaṭ	aḫabaṭu
f.	aḫabaṭi	aḫabaṭen

例：ḥaḏar (Pf.) / yaḥaḏer (Impf.) 「ある, いる」(XXVIII-1)

Impr.	sg.	pl.
m.	aḥaḏer	aḥaḏru
f.	aḥaḏri	aḥaḏren

通常は, *gahawa* シンドロームによって挿入された母音に強勢が置かれる (例: [aḫábaṭu], [aḫábaṭi])。

3.5.4 弱動詞

3.5.4.1 C₁=w の動詞

第1語根子音が弱子音の /w/ となる弱動詞の場合, 完了形は強動詞と同様に活用するが, 未完了形は以下の例に示すように, 接頭辞母音が長母音の /ō/ となる¹⁶⁴⁾。

完了形 C₁aC₂aC₃ パターン

例¹⁶⁵⁾: wagaf (Pf.) / yōgaf (Impf.) 「立つ, 立っている」(IV-42)¹⁶⁶⁾

Pf.	sg.	pl.	Impf.	sg.	pl.
3 m.	wagaf	wagafu	3 m.	yōgaf	yōgafu
3 f.	wagafet	wagafen	3 f.	tōgaf	yōgafen
2 m.	wagaft	wagaftu	2 m.	tōgaf	tōgafu
2 f.	wagafti	wagaften	2 f.	tōgafi	tōgafen
1	wagaft	wagafne	1	ōgaf	nōgaf
Impr. ¹⁶⁷⁾	sg.	pl.			
m.	egef ~ ōgaf	ōgafu			
f.	egefi ~ ōgafi	ōgafen			

完了形 C₁iC₂iC₃ (あるいは C₁eC₂eC₃) パターン

例¹⁶⁸⁾: weṣel (Pf.) / yōṣal (Impf) 「着く」(IX-13)¹⁶⁹⁾

Pf.	sg.	pl.	Impf.	sg.	pl.
3 m.	weṣel	weṣlu	3 m.	yōṣal	yōṣalu
3 f.	weṣlet	weṣlen	3 f.	tōṣal	yōṣalen
2 m.	wṣelt	wṣeltu	2 m.	tōṣal	tōṣalu
2 f.	wṣelti	wṣelten	2 f.	tōṣali	tōṣalen

1	wşelt	wşenne	1	ōşal	nōşal
Impr.	sg.	pl.			
m.	ōşal	ōşalu			
f.	ōşali	ōşalen			

waga⁶ (Pf.) / yōga⁶ ~ yaga⁶ (Impf.) 「転ぶ」(XV-10) や次例の場合のように、未完了形に第1語根子音の /w/ が脱落する活用形を異形態として持つ動詞がある¹⁷⁰⁾。

例：wildet (Pf. 3 sg.f.) / tilid (~ tōlad) (Impf. 3 sg.f.) 「産む」(VI-1)¹⁷¹⁾

Pf.	sg.	pl.	Impf.	sg.	pl.
3 f.	wildet	wilden	3 f.	tilid ~ tōlad	yilden
2 f.	wlitti	wlitten	2 f.	tildi	tilden

3.5.4.2 C₁=ʔ (ハムザ) の動詞

第1語根子音が /ʔ/ (ハムザ) となる動詞は、完了形で /ʔ/ (ハムザ) と母音を含む音節が脱落する場合と、/ʔ/ (ハムザ) のみが脱落する場合に分けられる。前者の例を次にあげる。

例：χað (Pf.) / yāχoð (Impf.) 「取る」(XIV-2)¹⁷²⁾

Pf.	sg.	pl.	Impf.	sg.	pl.
3 m.	χað	χaðu	3 m.	yāχoð	yāχoðu
3 f.	χaðet	χaðen	3 f.	tāχoð	yāχoðen
2 m.	χatt	χattu	2 m.	tāχoð	tāχoðu
2 f.	χatti	χatten	2 f.	tāχoði	tāχoðen
1	χatt	χaðne	1	āχoð	nāχoð
Impr. ¹⁷³⁾	sg.	pl.			
m.	oχoð ~ χoð	oχoðu ~ χoðu			
f.	oχoði ~ χoði	oχoðen ~ χoðen			

例：kal (Pf.) / yākul (Impf.) 「食べる」(III-43)¹⁷⁴⁾

Pf.	sg.	pl.	Impf.	sg.	pl.
3 m.	kal	kalu	3 m.	yākul	yāklu
3 f.	kalet	kalen	3 f.	tākul	yāklen
2 m.	kalt	kaltu	2 m.	tākul	tāklu
2 f.	kalti	kalten	2 f.	tākli	tāklen
1	kalt	kalne	1	ākul	nākul

Impr. ¹⁷⁵⁾	sg.	pl.
m.	okul ~ kul	oklu
f.	okli	oklen

次に、完了形の活用で第1語根子音が /ʔ/ (ハムザ) が脱落しない場合の例をあげる。

例：amar (Pf.) / yāmar (Impf.) 「命令する」(X-35)¹⁷⁶⁾

Pf.	sg.	pl.	Impf.	sg.	pl.
3 m.	amar	amaru	3 m.	yāmar	yāmaru
3 f.	amarat	amaren	3 f.	tāmar	yāmaren
2 m.	amart	amartu	2 m.	tāmar	tāmaru
2 f.	amarti	amarten	2 f.	tāmari	tāmaren
1	amart	amarne	1	āmar	nāmar
Impr.	sg.	pl.			
m.	āmar	āmaru			
f.	āmari	āmaren			

3.5.4.3 C₂=w ~ y の動詞

まずはじめに、第2語根が /w/ の場合の活用パターン例を次にあげる。ジバーリ・アラビア語では基本的にこの範疇に属する動詞すべてにおいて、完了形の場合は C₁āC₃ と C₁uC₃ による活用形となり、未完了形の場合は C₁ūC₃ による活用形となる。

例¹⁷⁷⁾：gāl (Pf.) / ygūl (Impf.) 「言う」(X-6)

Pf.	sg.	pl.	Impf.	sg.	pl.
3 m.	gāl	gālu	3 m.	ygūl	ygūlu
3 f.	gālet	gālen	3 f.	tgūl	ygūlen
2 m.	gult	gultu	2 m.	tgūl	tgūlu
2 f.	gulti	gulten	2 f.	tgūli	tgūlen
1	gult	gunne	1	ogūl	ngūl
Impr. ¹⁷⁸⁾	sg.	pl.			
m.	ogol ~ gol ~ gūl	gūlu			
f.	gūli	gūlen			

未完了形の活用において、接頭辞母音を含む音節は強勢のない開音節となるため、母音が脱落する。一人称単数の未完了形の場合は、接頭辞母音が保持されるが、通常は語幹母音と母音調和するかたちで /u/ ([u]~[o]) となる¹⁷⁹⁾。カイロ方言の影響を受

けて、特に若年層では以下の例に見られるように、一人称単数の未完了形の場合もより一般的な接頭辞母音の /a/ を使う傾向が強い¹⁸⁰⁾。

例：šāf (Pf.) / yšūf (Impf.) 「見（え）る」(I-73)

Pf.	sg.	pl.	Impf.	sg.	pl.
3 m.	šāf	šāfu	3 m.	yšūf	yšūfu
3 f.	šāfet	šāfen	3 f.	tšūf	yšūfen
2 m.	šuft	šuftu	2 m.	tšūf	tšūfu
2 f.	šufti	šuften	2 f.	tšūfi	tšūfen
1	šuft	šufne	1	ašūf	nšūf
Impr.	sg.	pl.			
m.	šūf	šūfu			
f.	šūfi	šūfen			

次に、第2語根が /y/ の場合の活用パターンの例をあげる。この範疇に属する動詞のほとんどが基本的に、完了形の場合は C₁āC₃ と C₁iC₃ による活用形となり、未完了形の場合は C₁iC₃ による活用形となる。

例¹⁸¹⁾：šāl (Pf.) / yšīl (Impf.) 「運ぶ」(IX-22)

Pf.	sg.	pl.	Impf.	sg.	pl.
3 m.	šāl	šālu	3 m.	yšīl	yšīlu
3 f.	šālet	šālen	3 f.	tšīl	yšīlen
2 m.	šilt	šiltu	2 m.	tšīl	tšīlu
2 f.	šilti	šilten	2 f.	tšīli	tšīlen
1	šilt	šinne	1	ašīl	nšīl
Impr.	sg.	pl.		~ tšīl	
m.	šīl ~ šil	šīlu			
f.	šīli	šīlen			

未完了形では接頭辞母音が脱落するが、一人称単数形の場合は接頭辞母音が語幹母音と母音調和を起こした形式と、より一般的な接頭辞である /a/ による形式がある。次の例では、接頭辞母音と語幹母音が母音調和しているというより、いわゆるイマーラによって接頭辞母音が狭い母音となったとも考えられる¹⁸²⁾。

例：ğāb (Pf.) / yğīb (Impf.) 「持って来る」(IX-23)

Pf.	sg.	pl.	Impf.	sg.	pl.
3 m.	ğāb	ğābu	3 m.	yğīb	yğību

3 f.	ğābet	ğāben	3 f.	tğīb	yğīben
2 m.	ğibt	ğibtu	2 m.	tğīb	tğību
2 f.	ğibtī	ğibtēn	2 f.	tğībī	tğībēn
1	ğibt	ğībne	1	ağīb	nğīb
Impr. ¹⁸³⁾	sg.	pl.		~ eğīb	
m.	ğīb	ğību			
f.	ğībī	ğībēn			

命令形については、第2語根が/w/の場合の活用パターンと同様に、C₁iC₃による活用形による場合と、特に男性単数形においてより古い短縮形を持つ場合とがある¹⁸⁴⁾。

例：bāʿ (Pf.) / ybīʿ (Impf.) 「売る」(XII-3)

Impr.	sg.	pl.
m.	ebeʿ ~ bīʿ	bīʿu
f.	bīʿī	bīʿēn

未完了形の場合はC₁iC₃による活用形となるが、完了形の場合にC₁āC₃とC₁uC₃による活用形となる動詞がある。例：tāḥ (Pf.) / ytīḥ (Impf.) 「転ぶ」(XV-10) cf. toḥt (Pf. 2 sg.m. ~ 1 sg.) ; nāk (Pf.) / ynīk (Impf.) 「性交する」(I-57) cf. nukt (Pf. 2 sg.m. ~ 1 sg.)。

また、完了形の場合にC₁āC₃とC₁iC₃あるいはC₁uC₃による活用形となるが、未完了形の場合にC₁āC₃による活用形となる動詞がある。例：nām (Pf.) / ynām (Impf.) 「眠る」(IV-37) cf. nīmt (Pf. 2 sg.f. ~ 1 sg.) ; ḫāf (Pf.) / yḫāf (Impf.) 「恐れる」(XVI-9) cf. ḫoft (Pf. 2 sg.m. ~ 1 sg.)。

3.5.4.4 C₂=ʾ (ハムザ) の動詞

ジバーリ・アラビア語では第2語根が/ʾ/ (ハムザ) の動詞は、咽頭摩擦音/ħ/に変化しており、きわめて顕著な方言特徴となっている。

例¹⁸⁵⁾：saʿal (Pf.) / yasʿal (Impf.) 「問う」(X-9)¹⁸⁶⁾

Pf.	sg.	pl.	Impf.	sg.	pl.
3 m.	saʿal	saʿalu	3 m.	yasʿal	yasʿalu
3 f.	saʿalet	saʿalen	3 f.	tasʿal	yasʿalen
2 m.	saʿalt	saʿaltu	2 m.	tasʿal	tasʿalu
2 f.	saʿalti	saʿalten	2 f.	tasʿali	tasʿalen
1	saʿalt	saʿanne	1	asʿal	nasʿal

Impr.	sg.	pl.
m.	as'al	as'alu
f.	as'ali	as'alēn

3.5.4.5 C₃=y の動詞

第3語根が /y/ の弱動詞は、完了形と未完了形の組み合わせの観点から三つのパターンに分けられる。まず、完了形 C₁aC₂a と未完了形 yaC₁C₂i の組み合わせパターンの例をあげる。

例¹⁸⁷⁾: maše (Pf.) / yimši (Impf.) 「歩く」(IX-16)

Pf.	sg.	pl.	Impf.	sg.	pl.
3 m.	maše	mašu	3 m.	yimši	yimšu
3 f.	mašet	mašen	3 f.	timši	yimšen
2 m.	mašēt	mašētu	2 m.	timš	timšu
2 f.	mašēti	mašēten	2 f.	timši	timšen
1	mašēt	mašēne	1	imši	nimši
Impr.	sg.	pl.			
m.	imši	imšu			
f.	imši	imšen			

未完了形の二人称単数男性形において、語末の母音が脱落した活用形を使うのが (cf. /timš (Impf. 2 sg.m.)/), 方言的特徴となっている¹⁸⁸⁾。同じことが、完了形 C₁aC₂a と未完了形 yaC₁C₂a の組み合わせパターンにも当てはまる¹⁸⁹⁾。

例¹⁹⁰⁾: бага (Pf.) / yabga (Impf.) 「なる」(XXVIII-3)

Pf.	sg.	pl.	Impf.	sg.	pl.
3 m.	baga	bigyu	3 m.	yabga	yabgu
		~ bigi			
3 f.	bagat	bigyen	3 f.	tabga	yabgen
		~ bigyet			
2 m.	bgīt	bgītu	2 m.	tabg	tabgu
2 f.	bgīti	bgīten	2 f.	tabgi	tabgen
1	bgīt	bgīne	1	abga	nabga

また、完了形 C₁iC₂i と未完了形 yaC₁C₂a の組み合わせパターンについても同様である。

例¹⁹¹⁾: nisi (Pf.) / yansa (Impf.) 「忘れる」(XVI-5)

Pf.	sg.	pl.	Impf.	sg.	pl.
3 m.	nisi	nisyu	3 m.	yansa	yansu
3 f.	nisyet	nisyen	3 f.	tansa	yansen
2 m.	nsīt	nsītu	2 m.	tans	tansu
2 f.	nsīti	nsīten	2 f.	tansi	tansen
1	nsīt	nsīne	1	ansa	nansa
Impr.	sg.	pl.			
m.	ans	ansu			
f.	ansi	ansen			

未完了形一人称単数形の接頭辞母音は、語幹母音が /a/ となる活用形では基本的に /a/ で現れるが、語幹母音が /i/ の例に見られるように、母音調和を起こす場合とより一般的な /a/ を使う場合とでゆれがある¹⁹²⁾。次の例では、/eğri (Impf. sg.m.)/ の方がより古い形式で、若年層では /ağri (Impf. 1 sg.m.)/ の方を好む傾向にある¹⁹³⁾。

例: ġara (Pf.) / yiğri (Impf.) 「走る」(IX-17)

Pf.	sg.	pl.	Impf.	sg.	pl.
3 m.	ġara	ġaru	3 m.	yiğri	yiğru
3 f.	ġarat	ġaren	3 f.	tiğri	yiğren
2 m.	ġarēt	ġarētu	2 m.	tiğr	tiğru
2 f.	ġarēti	ġarēten	2 f.	tiğri	tiğren
1	ġarēt	ġarēne	1	ağri	niğri
Impr.	sg.	pl.		~ eğri	
m.	eğri	eğru			
f.	eğri	eğren			

gahawa シンドロームの母音挿入による未完了形は以下の例のようになる。

例¹⁹⁴⁾: ġaši (Pf.) / yağaša (Impf.) 「近づく」(IX-3)

Pf.	sg.	pl.	Impf.	sg.	pl.
3 m.	ġaši	ġašyu	3 m.	yağaša	yağašu
3 f.	ġašyet	ġašyen	3 f.	tağaša	yağašen
2 m.	ġašīt	ġašītu	2 m.	tağaš	tağašu
2 f.	ġašīti	ġašīten	2 f.	tağaši	tağašen
1	ġašīt	ġašīne	1	ağaša	nağaša

Impr.	sg.	pl.
m.	ağaš	ağašu
f.	ağaši	ağašen

3.5.4.6 C₃=³ (ハムザ) の動詞

第3語根が /p/ (ハムザ) に対応するジバーリ・アラビア語の弱動詞は、先述した第3語根が /y/ の弱動詞と同じ活用になる¹⁹⁵⁾。未完了形の二人称単数男性形において、語末の母音が脱落した活用形を使う。

例¹⁹⁶⁾: gara (Pf.) / yagra (Impf.) 「読む」 (X-28)

Pf.	sg.	pl.	Impf.	sg.	pl.
3 m.	gara	garu	3 m.	yagra	yagru
3 f.	garat	garen	3 f.	tagra	yagren
2 m.	garēt	garētu	2 m.	tagr	tagru
2 f.	garēti	garēten	2 f.	tagri	tagren
1	garēt	garēne	1	agra	nagra
Impr.	sg.	pl.			
m.	agr	agru			
f.	agri	agren			

3.5.4.7 C₂=C₃ の動詞

第2語根子音と第3語根子音が同じになる場合の動詞は、語幹母音が /i/ になるか、/u/ になるかの活用パターンがある¹⁹⁷⁾。次の語幹母音が /u/ ([u]~[o]) となる例からわかるように、接頭辞母音が強勢のない開音節となり脱落する。

例¹⁹⁸⁾: başş (Pf.) / yboşş (Impf.) 「見る」 (I-74)

Pf.	sg.	pl.	Impf.	sg.	pl.
3 m.	başş	başşu	3 m.	yboşş	yboşşu
3 f.	başşat	başşen	3 f.	tboşş	yboşşen
2 m.	başşēt	başşētu	2 m.	tboşş	tboşşu
2 f.	başşēti	başşēten	2 f.	tboşşi	tboşşen
1	başşēt	başşēne	1	aboşş	nboşş
Impr.	sg.	pl.			
m.	boşş	boşşu			

f. bošši boššen

šakk (Pf.) / yšekk ~ yšokk (Impf.) 「疑う」(XVI-20) の例に見られるように、語幹母音に /u/ と /i/ の両方を異形態として持つ動詞もあるが、この動詞の場合、/yšokk/ の活用形の方がより古い形式である¹⁹⁹⁾。

3.5.5 「来る」の動詞

ジバーリ・アラビア語で古典アラビア語の /gā'a/ 「来る」に対応する動詞の活用形は以下のようになる。

例：ǧe (~ ǧa) (Pf.) / yīǧi (Impf.) 「来る」(IX-2)

Pf.	sg.	pl.	Impf.	sg.	pl.
3 m.	ǧe (~ ǧa)	ǧū ~ ǧow ~ ǧum	3 m.	yīǧi	yīǧu
3 f.	ǧāt	ǧin	3 f.	tīǧi	yīǧin
2 m.	ǧīt	ǧītu	2 m.	tīǧ ~ tīǧi	tīǧu
2 f.	ǧīti	ǧīten	2 f.	tīǧi	tīǧen
1	ǧīt	ǧīne	1	tīǧi	nīǧi
Impr.	sg.	pl.			
m.	ta'āl	ta'ālu			
f.	ta'āli	ta'ālen			

3.5.6 「与える」の動詞

ジバーリ・アラビア語で「与える」を意味する動詞の活用形は以下のようになる。

例：'aṭa (Pf.) / ya'ti (Impf.) 「与える」(XII-1)

Pf.	sg.	pl.	Impf.	sg.	pl.
3 m.	'aṭa	'aṭu	3 m.	ya'ti	ya'tu
3 f.	'aṭat	'aṭen	3 f.	ta'ti	ya'ten
2 m.	'aṭēt	'aṭētu	2 m.	ta't	ta'tu
2 f.	'aṭēti	'aṭēten	2 f.	ta'ti	ta'ten
1	'aṭēt	'aṭēne	1	a'ti	na'ti
Impr.	sg.	pl.			
m.	a't	a'tu			
f.	a'ti	a'ten			

/aṭa/ およびその類似形を用いるのは遊牧民方言の特徴であるが、次のようなカイ

口方言からの借用形も在証される。

例：addē (Pf.) / yiddi (Impf.) 「与える」 (XII-1)

Pf.	sg.	pl.	Impf.	sg.	pl.
3 m.	adda	addu	3 m.	yiddi	yiddu
3 f.	addēt	adden	3 f.	tiddi	yidden
2 m.	addēt	addētu	2 m.	tidd	tiddu
2 f.	addēti	addēten	2 f.	tiddi	tidden
1	addēt	addēne	1	eddi	niddi
Impr.	sg.	pl.			
m.	edd	eddu			
f.	eddi	edden			

3.5.7 「見る」の動詞

ジバーリ・アラビア語のきわだった方言特徴の一つが、「見る」動詞に Cl.A. /raʾā/ の反射形を使用することである²⁰⁰。すでに指摘したように、第2語根の /ʾ/ (ハムザ) が咽頭摩擦音の /ħ/ に変化しているのも、ジバーリ・アラビア語の特徴である。

例：raʾa (Pf.) / yerʾi (Impf.) 「見(え)る」 (I-73)

Pf.	sg.	pl.	Impf.	sg.	pl.
3 m.	raʾa	raʾu	3 m.	yerʾi	yerʾu
3 f.	raʾat	raʾen	3 f.	terʾi	yerʾen
2 m.	raʾēt	raʾētu	2 m.	terʾ	terʾu
2 f.	raʾēti	raʾēten	2 f.	terʾi	terʾen
1	raʾēt	raʾēne	1	erʾi	nerʾi
Impr.	sg.	pl.			
m.	erʾ	erʾu			
f.	erʾi	erʾen			

能動的に(あるいは意図的に)「見る」という意味の動詞でも、ジバーリ・アラビア語は以下のような動詞を使う²⁰¹。

例：fakkar (Pf.) / yfakker (Impf.) 「見る」 (I-74)

Pf.	sg.	pl.	Impf.	sg.	pl.
3 m.	fakkar	fakkaru	3 m.	yfakker	yfakkəru
3 f.	fakkarat	fakkaren	3 f.	tfakker	yfakkəren

2 m.	fakkart	fakkartu	2 m.	tfakker	tfakkøru
2 f.	fakkarti	fakkarten	2 f.	tfakkæri	tfakkøren
1	fakkart	fakkarne	1	afakker	nfakker
Impr.	sg.	pl.			
m.	fakker	fakkøru			
f.	fakkæri	fakkøren			

4 ジバーリ・アラビア語の系統

これまでの記述言語学的分析からも明らかになってきたように、現代のジバーリ・アラビア語はいわゆる遊牧民方言（ベドウィン方言）の諸特徴を有しながら、カイロ方言やその都市部標準語からの影響を受けたことなどのために、都市部定住民方言の共通特徴も有するに至っている。また一方では、シナイ半島地域を含む他のアラビア語諸方言には観察されない独特の方言特徴を、ジバーリ・アラビア語は有している。

従来のアラビア語方言学ではアラビア語諸方言を五つの方言群に分類する（Fischer and Jastrow 1980; Versteegh 1997: 148–172）。①アラビア半島方言群、②メソポタミア方言群、③シリア・パレスチナ方言群、④エジプト方言群、⑤マグリブ（北アフリカ）方言群である²⁰²。これらの地域方言群にかぶさるように、定住民方言タイプと遊牧民方言タイプが分布している。地理的に遠く離れた方言の場合など、都市部の定住民方言は相互の違いも多くあるが、いくつかの特徴を共有しており²⁰³、より古いアラビア語（古典アラビア語あるいは古代アラビア語）の特徴を残存させている遊牧民方言と対立している。以下に典型的な遊牧民方言の特徴とされるものをあげる（Rosenhouse 1984: 8–53）。

- (1) イマーラ現象（同化による広母音の狭母音化現象）ならびに強調音のかぶせ音素化（タフヒーム現象）の不在
- (2) 二重母音の保持
- (3) 母音 /a/, /i/, /u/ が音素として機能
- (4) 歯間摩擦音の保持
- (5) 古典アラビア語の /q/ が有声音の /g/ に変化
- (6) *gahawa* シンドローム
- (7) 音節構造ならびにアクセント体系の保持
- (8) 代名詞・動詞の二人称と三人称の複数形において男性形と女性形の対立が残存

- (9) 動詞派生形 IV 形が生産的に機能
- (10) 内的受動形の残存
- (11) 動詞の活用語尾の /-n/ が保持
- (12) 動詞の接頭辞表現があまり使われない
- (13) イダーファ（属格構造）において構成位相（status constructus）を多用
- (14) タンウィーン（名詞不定語尾）の残存

これらの特徴のすべてが各地域の遊牧民方言に例外なく在証されるものではないが、特に（4）と（5）と（8）の三つは遊牧民方言を特徴づける重要な要素となっている。ジバーリ・アラビア語についても、これらの三つの特徴を有しており、その意味では典型的な遊牧民方言と分類できる²⁰⁴。

遊牧民方言の地理的分布は系統分類的に連続しており、基本的に移動・移住によるものとみなせる²⁰⁵。しかしながら、現在広い地域に観察される遊牧民方言の分布は、威信的方言となった近隣の中心的都市部定住民方言への言語的同化作用や、歴史的に繰り返される部族間の合従連衡や日常的に起る部族間接触による地域方言的収斂作用による言語変化の結果であり²⁰⁶、おおよそ以下のような地理的方言群に分けることができる（Rosenhouse 1984: 4-7; Versteegh 1997: 145）。

- 東部方言帯：アラビア半島および湾岸地域方言群
 - シリア・メソポタミアの沙漠地域方言群
 - ヨルダン南部地域方言群
 - シナイ半島およびネゲブ沙漠地域方言群
- 西部方言帯：チュニジア・リビア・エジプト西部地域方言群²⁰⁷
 - アルジェリア西部・モロッコ地域方言群²⁰⁸

シナイ半島およびネゲブ沙漠地域は地理的に東部方言帯と西部方言帯の中間に位置しており、言語的特徴の面でも両方言帯の中間的方言地域に当たる²⁰⁹。

シナイ半島とアラビア半島北西部、ヨルダン南部、ネゲブ沙漠は地理的にも近く、これらの地域で話されている遊牧民方言には共通する特徴がある。アラビア半島中央部に関する十分な方言データがないために、アラビア半島を中心とした地域の方言分布に関しては未だ確定的なことが言えないのだが、おおよそ次の四大方言群に分けることができる（Johnstone 1967; Ingham 1982; Ingham 1994; Prochazka 1988; Palva 1991）。

- ① 北東アラビア半島方言（North-east Arabian dialects）
- ② 南アラビア半島方言（あるいは南西アラビア半島方言）（South[-west] Arabian dialects）

③ ヒジャーズ方言 (あるいは西アラビア半島方言) (ḥiǧāzī or West Arabian dialects)

④ 北西アラビア半島方言 (North-west Arabian dialects)

北東アラビア半島方言は、ナジドを中心とする地域の方言であり、アニザ部族やシャンマル部族の方言がこれに属する²¹⁰⁾。南アラビア半島方言は、イエメンやハドラムウトなどアラビア半島南部の方言である²¹¹⁾。ヒジャーズ方言は、ヒジャーズ地域やティハーマ地域の遊牧民方言である。北西アラビア半島方言は、アラビア半島北西部から、アカバ湾の東側地域、ヨルダン南部、さらにネゲブ沙漠やシナイ半島にかけて話される遊牧民方言である。

北西アラビア半島方言は、他のアラビア半島方言 (とくに近接する北東アラビア半島方言およびヒジャーズ方言) とは、①タンウィーン (名詞不定語尾) の残存形がないこと、② /g/ および /k/ の破擦音化がないこと、③動詞未完了形の二人称女性複数形・二人称男性複数形・三人称男性複数形における語末の /n/ がいないこと、などの重要な点で異なっているだけでなく、他のアラビア半島方言や隣接する定住民方言には存在しない特徴を共有していることから、一つの方言グループとして認定できる (Palva 1991: 155–156)。しかしながら、北西アラビア半島方言に属する方言を観察すると、これらの諸方言が一つの共通する祖語的方言から発達してきたものというよりは、地域方言間の接触による共通語化を通じて形成されてきたことがわかる。たとえば、未完了形の接頭辞 /b(i)-/ を持つか持たないか、未完了形の接頭辞母音と語幹母音の間に母音調和があるかどうか、という観点から、北西アラビア半島方言は東部グループと西部グループに分けることができる²¹²⁾。北西アラビア半島方言内の東部・西部グループを分ける重要な特徴をまとめると次表のようになる。

表7 北西アラビア半島方言の東部・西部グループの特徴

	/g/ と /k/ の破擦音化	/b(i)/+ 未完了形	未完了形の母音調和
東部グループ	無	無	無
西部グループ	無	有	有

ジバーリ・アラビア語は、/b(i)/+ 未完了形を多用し、未完了形の接頭辞母音と語幹母音の母音調和がある方言であり、北西アラビア半島方言のなかの西部グループに属する。

/g/ と /k/ の破擦音化は、アラビア半島中央部から拡散していった言語革新である

(/čalb/, /simač/ Hā'il, サウジアラビア；/čalb/, /samak/ Mūte-Karak, ヨルダン；/čalb/, /samač/ Qalqīya, パレスチナ；/čalb/, /samak/ Dēr ez-Zōr, シリア；cf. /kalb/, /samak/ エルサレム)²¹³⁾。北西アラビア半島方言の東部・西部グループともにこの革新を受けていないということから、北西アラビア半島方言と他のアラビア半島方言を区別する示差的な地域方言特徴となっている。

/b(i)/+ 未完了形については、隣接する定住民方言あるいは威信の共通方言としての都市部方言からの影響を受けて、遊牧民方言である北西アラビア半島方言のなかの一部の地域方言が多用するようになったと推定される。そのために西部グループのなかでも、ネゲブのようにシリア・パレスチナの影響を受けやすい方言と、シナイ半島の一部の方言のようにエジプトの影響を受けやすい方言が存在する²¹⁴⁾。/b(i)/+ 未完了形の使用は、西部グループのなかでも各方言間での動詞の時制・相体系において果たす意味機能が異なっていることに加えて、/b(i)/+ 未完了形の生起が個人語レベルで社会的偏差が大きいことを考え合わせると、/b(i)/+ 未完了形の形式は比較的最近になってから、定住民方言と接する機会の多い西部グループの方言話者が使うようになったと推定できる²¹⁵⁾。

未完了形における接頭辞母音と語幹母音の母音調和の有無による東部・西部方言の区分は、比較的古い方言区分によるものと考えられる。西部グループでは、ジバーリ・アラビア語の場合と同じように、接頭辞母音と語幹母音の母音調和が起るのに対して、東部グループでは語幹母音に関わりなく接頭辞母音が /a/ または /i/ で変化しない。ジバーリ・アラビア語の未完了形の母音調和のパターンに関する分析でも確認されたが、母音調和パターンの形成過程においては、特に接頭辞母音と語幹母音が /u/ ([u]~[o]) の場合に観察されたように近接する子音が大きな影響を与えているだけでなく、在証例として数は多くないものの、近接する子音に関わりなく、少なくとも以前の通時的段階では母音交替による内的受動形から変化した結果、当該の母音調和パターンを有するようになったと推定できるような動詞が存在していた。その意味で、ジバーリ・アラビア語のような未完了形の母音調和パターンは、母音交替による内的受動形が生産的でなくなった段階として生まれてきたとも言える²¹⁶⁾。

北西アラビア半島方言において、未完了形の接頭辞母音と語幹母音の母音調和の有無による東部・西部グループの区別が比較的古い段階のものであり²¹⁷⁾、/g/ と /k/ の破擦音化の通時的音変化が東部・西部グループともに起らないことで地域的方言特徴を共有する段階となり、さらに最近では西部グループの方言では、定住民方言との接触によって /b(i)/+ 未完了形を獲得しつつあるが、シナイ半島とネゲブ沙漠の遊牧民

方言の違いに見られるように、近接する定住民方言が有する /b(i)+ 未完了形の機能に応じて、西部グループ内においてもあらたな区分が生まれつつある段階と言える。現在観察される共通の方言特徴を基準に、一つのまとまった地域方言として認定可能な北西アラビア半島方言についても、比較的古い段階では異なった方言であった東部グループと西部グループの諸方言が、相互の方言接触を通じて一つの地域方言として共通する特徴を共有するようになって形成されてきた地域方言であるという理解が可能である。

ジバーリ・アラビア語は他のシナイ半島方言とともに北西アラビア半島方言の西部グループに属しているが、シナイ半島内の方言は基本的に北シナイ方言と南シナイ方言に大きく区分できる。北シナイ地域は地理的にはアフリカ大陸とユーラシア大陸のつなぎ目にあり、人びとが移動する通過地帯にあるという歴史的な条件もあった。そのため、方言分布の面でも、北シナイ方言は基本的には北西アラビア半島方言の西部グループに属すると言えるが、最も東側に位置する方言は、隣接する北東アラビア半島方言のナジド方言タイプと特徴を共有しており、その一方で西側の方言については、エジプトのデルタ地域に近くなればなるほど、定住民方言の影響が強く示すようになる。その意味で、北シナイ方言は一つの方言的連続体をなしていると言える。ヨングの研究によれば、北シナイ方言は大きく三つのグループに分類することができる(de Jong 2000)。その分類によると、グループ I は最も東側の方言群であり、北西アラビア半島方言の西部グループの特徴を顕著に持っている。グループ III は最も西側の方言群であり、エルアリーシュの方言を境にエジプト側のデルタ地域の定住民方言と共有する特徴を持っている。地理的に中間地帯に位置するグループ II は、言語特徴の面でもグループ I と III の両方と共通する特徴を持ちながらも、独自の方言特徴も有している²¹⁸⁾。

方言的連続体と見なせる北シナイ方言に比べて、南シナイ方言は相互に共有する特徴が多い一つのまとまった方言群と見なせるだろう²¹⁹⁾。これは、南シナイ地域が急峻な山岳地帯によって北シナイ地域と隔絶されている上に、北側から進入してきた諸部族が他所へ移動することなく、次々と重なるように居住地帯をつめていった結果、比較的狭い地域に異なる部族系統に属する多くの部族が共住するようになったという歴史的な経緯のためである²²⁰⁾。また、ナイル・デルタ地域から移動してきたサワールハ部族や、比較的最近になってアラビア半島から移動してきたムゼイナ部族の存在にも見られるように、エジプト側の定住民方言やアラビア半島側の遊牧民方言の特徴をより直接的に反映した方言特徴を共有していることもある²²¹⁾。したがって、南シ

ナイ方言は、北シナイ方言のなかでも地理的に近いグループIIと共通する多くの特徴を持っている。その一方、エジプト側の定住民方言の影響を強く受けているために、グループIIIとも類似する特徴を持っており、さらにはホウェータート部族のように居住地域が北シナイ（さらにはアラビア半島北部からヨルダンまで）から南シナイまで広く分布する部族の方言の影響もあり、グループIの方言群とも共通する特徴を示す²²²⁾。しかしながら、二人称単数男性形の接尾代名詞 /-ku/ ([-k̄]~[-ku]) の場合のように、南シナイ方言にしか在証されない方言特徴を独占的に共有していることもあり、南シナイ方言は北シナイ方言とは異なる方言圏を形成していると言えるだろう。

ジバーリ・アラビア語は、南シナイ方言と多くの方言特徴を共有している反面、他の近接する方言には見られない孤立的方言特徴も多く持っている。これらの孤立的方言特徴のなかには、他の北西アラビア半島方言だけでなく、他の地域のアラビア語方言にも在証されない特徴もある。なかでも空間表現をめぐるジバーリ・アラビア語の言語形式は、他のアラビア語方言にはまったく在証されないものであり、ジバーリ・アラビア語がピジン・クレオールのアラビア語という初期の言語形成過程を経て成立した言語であることを示す重要な言語的証拠でもある²²³⁾。

ジバーリ部族が強制移住させられてきた西暦5世紀から6世紀にかけて、シナイ半島南部ではどのような言語（あるいはアラビア語方言）が話されていたかについては、資料がほとんど残っていないために推量の域を出ない。この当時、日常的には北アラビア語の古代方言を使い、文語的表現にはアラム語の方言であるナバテア語を使っていたアラブ系のナバテア人がシナイ半島に居住していた。また、イスラム勃興以前にも、アラブ系部族の一部がアラビア半島からエジプトへ移住しており、ワーディ・フェイラーンには古くからアラブ系のキリスト教徒が庵を結んでいた。これらを考え合わせると、当初は（俗）ラテン語の一方言を話していた可能性の高いジバーリ部族は、北西アラビア半島方言の古層に属する方言特徴を持つアラビア語の古代方言を使っていた人びとと日常的に接触する間に、簡単なコミュニケーションの道具としてのピジンのアラビア語を習得し、やがてかつての母語であるラテン語の方言に代わって、ピジンのアラビア語を母語として採用したようである。そしてその結果としてクレオールの特徴を多分に持つアラビア語が形成されたと推定される。イスラム勃興後、アラビア半島から多くのアラブ系諸部族が南シナイに進入して居住するようになると、比較的隔絶した地理的条件のなかで、聖カトリヌ修道院を中心とする社会経済的にまとまった地域が編成され、これにつれて言語の面でも地域的方言特徴を共

有する方言群が形成されていった。さらに16世紀ごろを境に、エジプト本土側やアラビア半島内部からの有力部族集団の直接的な移住が再び盛んになると、新たな部族方言との接触により北シナイとは異なる方言特徴がもたらされた。特にエジプト本土のデルタ地域に定住していたサワールハ部族の大規模な移住によって、北西アラビア半島方言のなかでも西部グループに属する南シナイ方言は、同じグループに属する他の方言よりも定住民方言の特徴を強く示すようになったのである。ジバーリ部族に関して言えば、新たに地域方言として形成されてきた南シナイ方言の特徴を共有することで言語的同化をはかる一方、南シナイ地域における部族集団間関係におけるジバーリ部族の社会的位置が原因となって、自らの集団的アイデンティティー保持のための言語的指標を確立するという言語生態的な社会力学が働き、独特の孤立的方言特徴を發展させていったと推定される²²⁴⁾。このような脱クレオール化の過程において、ジバーリ・アラビア語にはピジン・クレオール的特徴の一部が温存されただけでなく、現在の他の北西アラビア半島方言には在証されない大複数形などの古い文法形式が残存したのであろう。また、ジバーリ部族の人びとは、聖カトリヌ修道院における彼らの社会的役割を通して定住民と日常的に接触する機会も多く²²⁵⁾、他の南シナイ方言に比べて定住民方言の影響を受ける度合いが高かったのも事実である²²⁶⁾。

注

- 1) 本稿は、京都大学大学院文学研究科に提出した博士論文『ジバーリ・アラビア語(エジプト・シナイ半島南部)の言語人類学的研究』の第二部「ジバーリ・アラビア語の記述言語学的分析」の第1章に加筆・修正を施したものである。尚、同博士論文には補遺として分類基礎語彙集が付されているが、未出版であるため、下記の注にも示したように本稿の記述参照については、西尾(1992)を参照されたい。また本稿は、科学研究費補助金による基盤研究(S)「チベット文化圏における言語基層の解明」(代表・長野泰彦、平成16-20年度、課題番号16102001)の平成16年度の研究成果の一部である。同じく本稿に関わる調査の一部は、科学研究費補助金による基盤研究(S)「アラビアンナイトの形成過程とオリエンタリズムの文学空間創出メカニズムの解明」(代表・西尾哲夫、平成18-22年度、課題番号18102001)によっている。
- 2) ジバーリ部族については、西尾(2000)ならびに西尾(2006)の第2章を参照。
- 3) ジバーリ・アラビア語の発音では、/ǧbali/と最初の音節の母音が脱落する。
- 4) 聖カトリヌ修道院を建設したユスティニアヌスI世はダニューブ河南域の出身だった。彼はラテン語を母語としており、ギリシア語が苦手だったため、自分と同郷かそれに近い地域出身でラテン語系の言語を話す集団を聖カトリヌ修道院の警護役にあてたとと思われる。黒海南部地域からバルカン半島一帯の住民の中では、トラキア系先住民の一部がローマ化してラテン語を話すようになっていた。彼らの子孫が、現在アルーマニア(アロムン)またはヴラフと呼ばれている人びとである。ジバーリ部族の一部はワラキアからボスニアにかけての地域に暮らしていたラテン語(の方言)を話すようになったトラキア系先住民の末裔であり、さらにアルーマニア(アロムン)あるいはヴラフという民族集団がジバーリ部族と同系統の末裔であるのは確実であると思われる。現在、アルーマニア系の人びとの居住地はトラキア地方やダルマチア地方の山岳地を中心に、ギリシア、ブルガリア、旧ユーゴスラビアな

- どのダニューブ河南部の諸地域に分散している（西尾 2006: 22-44）。
- 5) 現代ジバリー・アラビア語の統語現象や空間語彙表現の中にも、ピジン・クレオール化した言語に普遍的に見られる特徴の残滓が確認される。西尾（2006）の第3-4章の議論を参照。
 - 6) 9年前に物故した（彼の魂に平安あれ）。ジバリー部族の方言や民俗に関わることを教示していただいたことに対して、あらためて感謝の意を記す。
 - 7) 5年前に物故した（彼女の魂に平安あれ）。ジバリー部族の女性の文化や伝説・民話を教示していただいてことに対して、あらためて感謝の意を記す。
 - 8) 現在は廃村になっており、誰も住んでいない。
 - 9) 実際の言語調査にあたっては当初は、エジプト全土でもっとも理解されるカイロ方言を用い、必要に応じて標準アラビア語（あるいは英語）を用いた。
 - 10) ここではIPAによる表記のかわりに、比較方言学的研究を考慮して標準的なアラビア語の転写方式を採用している。
 - 11) 以降、ジバリー・アラビア語から例をあげる場合には、別に出版済みの分類基礎語彙の番号を付すので、詳細な語彙の情報は、*A Basic Vocabulary of the Bedouin Arabic Dialect of the Jbāli Tribe (Southern Sinai)*. (Studia Culturae Islamicae No. 43) Tokyo: Institute for the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa, 1992. 中の分類基礎語彙を参照。
 - 12) /talǧ ~ θalǧ/「雪」(XVII-11)の場合は、カイロ方言からの借用形であろう。cf. /tallaǧ (Pf.)/「凍る」(XVII-12)。
 - 13) ただし、複数形は /zarādebb/ のみが存在する。
 - 14) /šahhād/「乞食」(VIII-24) (<*/šahhād/). cf. カイロ方言形は /šahhāt/。
 - 15) ただし、複数形は /χodrawāt/ のみが存在する。
 - 16) 語末にくると、無声化する傾向にある。例: /sūg/「市(場)」(VIII-4)=[sūg ~ sūk]。
 - 17) /qaryat ilwādi/（「ワーディ村」）のように、/qarye/ は正式な村の名前を呼ぶときなどに使用される。ただし、複数形は有声音の /gora/ のみが存在する。
 - 18) ハムザ音を含んだ音節が脱落し、2語根となった動詞の場合においても、未完了形の活用においては語中のハムザ音脱落の音韻規則を想定した形式となる。例: /yākul (Impf.)/<*/ya'kulu/; /yāχoð (Impf.)/<*/ya'χuðu/. cf. /yāmar (Impf.)/<*/ya'maru/. ただし後者の /amar/ には /yōmor/ という未完了形も存在しており、*/yawmuru/>/yōmor/ という通時的変化を想定するならば、この場合には /amara/>*/wamara/ というような第1語根のハムザ音が /w/ となる変化をも想定する必要がある。
 - 19) ただし、複数形の /rūs/ の場合は問題が残る。通時的には、*/ru'ūs/>*/r'ūs/>/rūs/ の変化が可能であろう。
 - 20) /tabag/「皿」(V-7) や /wāfag (Pf.)/「養成する」(XIII-18) も参照。特に /g/ は、無声子音に前接する場合にも無声化する傾向にある。例: /stantagt/=[stantakt] (Pf. 2 sg.m. ~ 1 sg.)「吐く」(III-50)。有声化もまれに見られる。例: /šgayyar/=[zšgayyar]「小さい」(XX-15)。
 - 21) 詳細については、以下の接尾代名詞に関する記述を参照。
 - 22) 隣接する母音への影響については、以下の記述を参照。
 - 23) 強調音化の説明も参照。
 - 24) /h/ を含む接尾代名詞が後接する場合である。後述の接尾代名詞に関する説明も参照。
 - 25) 同様に第3語根が /d/ の動詞の二人称あるいは一人称完了形の例として、/hamatt/<*/hamadt/「押える」(XIV-14) ; /faratt/<*/faradt/「ひろげる」(XIV-32) ; /ħasatt/<*/ħasadt/「うらやむ、ねたむ」(XVI-17) などを参照。
 - 26) /kalne (Pf. 1 pl.)/「食べる」(III-43) の場合のように、同化しないこともある。また、/nizil/ではなく、/nazal/の活用形の場合には /nazalne (Pf. 1 pl.)/ (XV-15) のように同化しない。
 - 27) 上記と同様に、/h/ を含む接尾代名詞が後接する場合である。後述の接尾代名詞に関する説明も参照。
 - 28) 以下のような母音挿入の規則はいわゆる遊牧民方言の多くに観察される音韻現象であるが、コーヒーを表わす /gahawa/ (<*/qahwa/) を典型例として、gahawa シンドロームとアラビア語方言学では呼ぶ (Rosenhouse 1984: 23; Versteegh 1997: 149)。
 - 29) 2重子音となる場合には母音挿入は起らない。cf. /moχχ/「脳みそ」(I-4)。
 - 30) /yu'tos (Impf.)/ (I-22) の形式も在証される。
 - 31) 'arag (Pf.) / y'arag (Impf.) であるが、同じ意味で 'ereg (Pf.) / ya'rag (Impf.) (I-67) の活用形もあり、この場合は母音挿入が起らない。
 - 32) /yo'dor (Impf.)/ (XIII-6) の形式も在証される。

- 33) /yaʿšer (Impf.)/ (XIV-17) の形式も在証される。
- 34) /yahfað (Impf.)/ (XIV-26) の形式も在証される。
- 35) /nahr/ (XVII-45) の形式もカイロ方言あるいは標準アラビア語からの借用形として在証される。
- 36) cf. /wazen/ 「体重」(XX-19) (<*/wazn/). ただし、このような母音挿入形はジバリー・アラビア語での生産的音韻規則によるものというより、カイロ方言などの近隣方言からの借用の可能性が高い。cf. /weheš/ 「悪い」(XXI-16) </wihiš/ カイロ方言形。
- 37) /roçw/ (XXI-11) の形式も在証され、若い世代はこちらの方を好んで使う。
- 38) 聖カトリック修道院では修道僧がアラビア語でジバリー部族の人々と会話するのが普通であるが、修道僧同士のあいだでの通常の会話ではギリシア語を使うのが普通であり、当然のことながらジバリー・アラビア語のなかにもギリシア語起源の言葉が入ってきている。それらのギリシア語起源の借用語には母音 /o/ が出現しており、次に議論する短母音 /e/ の位置づけともあわせて、これらの短母音のジバリー・アラビア語における扱いは、より複雑な問題となる。
- 39) 以下の議論では音素分析において問題となる音声環境のみをとりあげる。語末の長母音の反射形である、/gade/ 「昼食」(III-3) (<*/gādāʾ/) や /ʾaše/ 「夕食」(III-4) (<*/ašāʾ/) のような場合も /e/ が出現する。
- 40) 女性形語尾の /-e/ (イダーファで [-et] ~ [-et]) は音声環境 (アクセントのない開音節) によって母音脱落が起きるのに対して、 /-a/ (イダーファで [-at] ~ [-at]) は母音が脱落しない。また、双数形語尾が付加される場合も母音脱落が起らない。例: /maratēn (du.)/ 「女(双数形)」(VII-3) (← /marat+ēn/) cf. /mara/ (単数形)。
- 41) /tgadda (Pf.)/ 「昼食をとる」(III-3) や /ʾašša (Pf.)/ 「夕食をとる」(III-4) の場合のように、例外もある。ただし、このような場合はカイロ方言あるいは標準語の影響の可能性が高い。
- 42) 文字通りには「傾く」ことを意味する。詳しくは以下のイマーラの議論を参照。
- 43) /i/ の異音である [e] も同様にシュワー音となる。例: [χallaši (Impr. sg.f.)] 「終える」(XV-5) cf. /χalleš (Impr. sg.m.)/。
- 44) シュワー母音を含んだ音節が脱落することもある ([magaššətēn] → [magaštēn])。
- 45) 前者の場合と同じく、シュワー母音を含んだ音節が脱落することもある ([ħallətēn] → [ħaltēn])。
- 46) 語頭の母音 (シュワー母音) が完全に脱落することもある ([χayti]). 詳細は (VII-26) の記述を参照。
- 47) 実際の観察では、3子音クラスターとなるのは、3子音のなかに接近音の /l/ やふるえ音の /r/, さらに鼻音の /m/ や /n/ といった、いわゆる流音が含まれている場合である。接尾代名詞の付加などによって3子音連続が出現する場合、基本的にはシュワー母音が挿入される。例: /oxt+he/ 「私の姉妹」(VII-26) → [oxtəhe]。
- 48) 詳細は (I-74) の記述を参照。音韻論的には基底で /fakkiru/ と表示でき、/fakkiru/ → [fakkeru] → [fakkəru ~ fakkru ~ fakru] と音声的に実現すると説明できる。
- 49) 詳細は (IX-1) の記述を参照。音韻論的には基底で /yrawwahu/ と表示でき、/yrawwahu/ → [yrawwəhu ~ yrawhu] と音声的に実現すると説明できる。
- 50) [a] については異音としての出現環境がはっきりしているので、詳細な音声表記が必要な場合にもみ用いる。
- 51) [badréy] のように、意味の強調のために語末の母音に強勢が置かれることがある。cf. /waçari/ 「遅い」(XXIII-15) → [wáçari] ~ [waçaréy]。また、一人称単数の接尾代名詞 /i/ についても、強調のために強勢が置かれて長母音化する。以下の接尾代名詞に関する記述を参照。
- 52) /dawā/ 「薬」(VI-21) → [dáwā] のような例外もある。
- 53) 例外として、/tahati/ 「私の下に」(XXII-9) → [taħúti] の場合がある。単独の前置詞としては一番最初の母音に強勢が置かれるが ([táħat]), 接尾代名詞形は第二番目の母音に強勢が置かれる ([taħátku] 等)。一人称単数形の場合は、強意のために語末に強勢が置かれて長母音化することもある。
- 54) カイロ方言 (/biʿid/) の影響からか、特に若年層の会話では /beʿid/ 「遠い」(XXII-17) も使われる。
- 55) /bīṭha/ 「(キャンパス地の) テント」(IV-2), /sriṭ/ 「ひも」(V-38) のような例外も存在するが、それらのほとんどがカイロ方言からの借用形あるいは周辺諸部族の方言共通形と見な

- せる。
- 56) 母音の脱落した /kbīr/ も使われる。おそらく /kbīr/ の方が古い形式で、若年層の方がより使う /kibīr/ はカイロ方言の影響と考えられる。
- 57) 母音の脱落した /kθīr/ も使われる。またカイロ方言と同じ /kiθīr/ も多用され、/kiθīr/ についてもカイロ方言の影響と考えられる。
- 58) 母音の脱落した /wsī/ も使われる。
- 59) /gwī/ 「強い」(XXI-10) (<*/qawī/) のような語構造の場合もイマラによる母音脱落と見なせる。
- 60) カイロ方言 (/wihiš/) からの借用とも考えられる。
- 61) (XXV-7) を参照。音韻論的には基底で /intiy/ と表記できる。
- 62) (XXV-13) を参照。
- 63) (XXV-15) を参照。
- 64) (XXV-9) を参照。音韻論的には基底で /intuw/ と表記できる。
- 65) (XXV-17) を参照。
- 66) (XXV-2) を参照。
- 67) 前置詞の /a'la/ 「～の上」の接尾代名詞形については、(XXII-8) を参照。また /-y/ については、/lay/ (← /l(i)+y/ 「～へ、に」)(XXVII-1)、/fay/ (← /f(i)+y/ 「～で、に」)(XXVII-5)、/bay/ (← /b(i)+y/ 「～で」)(XXVII-11) も参照。
- 68) これらの接尾代名詞の語末の母音に強勢が置かれて長母音化する現象は、ネゲブ砂漠からシナイ半島にかけてのベドウィン方言の特徴の一つである (Blanc 1970: 130; de Jong 2004: 164)。
- 69) /-i/ や /-nī/ と異なり、/-yi/ の場合は語末の母音に強勢が置かれて長母音化する現象は観察されない。北シナイのベドウィン方言では強勢が置かれて長母音化した /-yī/ が報告されている (de Jong 2000: 166-167, 285, 368)。
- 70) (XXV-6) を参照。
- 71) この現象はムゼイナ部族の方言など南シナイのいくつかのベドウィン方言にも観察される。また北シナイの一部のベドウィン方言でも報告されている (de Jong 2000: 282-288)。de Jong は、北シナイの同じような接尾代名詞が軟口蓋化および唇音化されているとして、これを /k/ と転写している。彼によれば、おそらく通時的には母音 /u/ の脱落と女性形接尾代名詞との対立の保持のために、/k/ (IPA では /q/) というこの単語だけに有効な新たな音素が形成されたとする。実際に古典アラビア語 (さらには標準アラビア語) には、起源的には /k/ の強調音 (咽頭化音) の系列として /q/ (=k/) が存在するが、少なくともジバーリ・アラビア語で観察される限りでは、咽頭化とよべるほど調音位置が後ろに後退しているかどうか判断がむずかしい。また、de Jong は有気/無気の対立についてはまったく報告していないものの、元々は余剰的な特徴であった無気音であることが示差的特徴となっていると考えた方が、ジバーリ・アラビア語の音韻論全体のなかでは説明として妥当であると考えられる。
- 72) (XXV-8) を参照。
- 73) 古典アラビア語における強調音 (咽頭化音) の無気性については、Fleisch (1958) および Blanc (1967) の議論を参照。
- 74) 前者の場合、実際の調音位置がいくぶん後退している。アラビア半島の諸方言では、狭母音の /i/ または /e/ の影響のため、女性形の方の /k/ の調音位置が硬口蓋の方へ前進する言語変化が起きており、アラビア半島中心部で起った同変化が外縁地域のシナイ半島南部へと漸進してきたという方言地理学的な見方もできる。
- 75) (XXV-14) を参照。
- 76) したがって音声学的には語末の子音 [h] は実際の発音ではほとんど聞こえないが、連続した文脈中で後続の単語が来る場合、聞き取れる。
- 77) (XXV-16) を参照。北シナイのベドウィン方言でも報告されている (de Jong 2000: 283)。
- 78) 一部の前置詞の場合は、2子音連続を解除するような語形変化をとともなうこともある。例: /ḡambo/ 「彼の隣に」、/ḡanabhe/ 「彼女の隣に」(XXII-4)。
- 79) (XXII-9) を参照。
- 80) (XXVII-8) を参照。同様の現象は北シナイのベドウィン方言でも報告されている (de Jong 2000: 166, 272, 285; cf. de Jong 2004: 163-164)。
- 81) (XXII-25) を参照。同様の現象は北シナイのベドウィン方言でも報告されている (de Jong 2000: 166, 368, 450)。

- 82) (XXV-4)を参照。北シナイのベドウィン方言でも報告されている (de Jong 2000: 283)。
- 83) 一部の前置詞の場合は、2子音連続を解除するような語形変化をとともうこともある。
例: /gambo/「彼の隣に」, /ḡanabne/「私たちの隣に」(XXII-4)。
- 84) それぞれの接尾代名詞については、(XXV-10)と(XXV-12)を参照。
- 85) 一部の前置詞の場合は、2子音連続を解除するような語形変化をとともうこともある。
例: /gambo/「彼の隣に」, /ḡanabkom/「あなたたち(男)の隣に」, /ḡanabken/「あなたたち(女)の隣に」(XXII-4)。
- 86) それぞれの接尾代名詞については、(XXV-18)と(XXV-20)を参照。
- 87) 一部の前置詞の場合は、2子音連続を解除するような語形変化をとともうこともある。
例: /gambo/「彼の隣に」, /ḡanabhom/「彼らの隣に」, /ḡanabhen/「彼女らの隣に」(XXII-4)。
- 88) (XXV-23)を参照。
- 89) 指示接頭辞の /ha~hā/ は北シナイのベドウィン方言やパレスチナ地域の方言にも報告されている (de Jong 2000: 172, 290, 370, 452, 512; Blau 1960: 20; Grotzfeld 1964: 46-47)。後に詳述するように、指示接頭辞の /ha~hā/ は指示代名詞だけでなく、通常は定冠詞に接頭化して (cf. /hal-/), 話し手と聞き手のあいだでの談話機能を有している。
- 90) 被調査者の意見によれば、指示接頭辞の /ha~hā/ のない指示代名詞が前置された、/ḡa ggalam/ や /ḡi lbint/ のような構造も可能だが、実際にはほとんど使われない。標準アラビア語(古典アラビア語)では指示代名詞が名詞に前置されるのが通常だが、カイロ方言では後置され、ジバーリ・アラビア語の構造はカイロ方言からの影響とも考えられる。しかしながら、周辺の方言と比較しても特異であることや、次に議論するように、ここにあげた①-③までの構造が異なる談話機能を有していることなどから、ジバーリ・アラビア語において独自に形成された構造と考えた方が妥当であろう。カイロ方言の指示代名詞の語順については、Doss (1979)を参照。
- 91) (XXV-25)を参照。
- 92) 被調査者の意見によれば、指示接頭辞の /ha~hā/ のない指示代名詞が前置された、/ḡāka lwalad/ や /ḡike lḡorme/ のような構造も可能だが、実際にはほとんど使われない。前注を参照。
- 93) (XXV-24)を参照。
- 94) シナイ半島の多くのベドウィン方言では、性による区別がなく、一部の方言で報告がある (de Jong 2000: 369, 451)。尚、標準アラビア語および古典アラビア語においても複数形の指示代名詞に性の区別はない。ジバーリ・アラビア語においても、次に議論するように、日常会話では、(特に指示代名詞が主語になる場合) 女性形複数形のかわりに男性形複数形(まれに男性形単数形)を使用することもあり(例: ḡallāka banāt「あれらは(=男性複数形)娘たちです」), さらには女性形の複数形の形態からみても (ḡell vs. ḡellet / ḡallāka vs. ḡallāket), シンメトリックな方向へ新たに形成されたものと考えられる (cf. ḡa vs. ḡāka / ḡell vs. ḡallāka)。
- 95) cf. カイロ方言形 /ḡol/。
- 96) 指示代名詞が前置された、/ḡellet ilḡarīm/ のような構造も可能だが、実際にはほとんど生起しない。前注も参照。
- 97) (XXV-26)を参照。
- 98) 前注参照。
- 99) 指示代名詞が前置された、/ḡallāket ilbanā/ のような構造も可能だが、実際にはほとんど生起しない。前注も参照。
- 100) 先述したように、指示代名詞が先頭に置かれた /ḡāka lwalad/ も可能だが、生起例はほとんどない。両者は自由変異とも考えられるが、カイロ方言の影響などによる通時的な変化を示していると捉えた方がいいだろう。前注も参照。
- 101) 指示接頭辞の /ha~hā/ の談話機能については、後の節における議論を参照。
- 102) ②の形式は文中のどの位置でも生起するのに対して、③の形式は話題化文と同じく文頭で生起する傾向が強い。両者は実際の会話場面で生起するのが普通であり、次に議論する指示接頭辞自体の機能ともあわせて談話機能との関連から議論する必要がある。
- 103) この文は文法的には話題化によって目的語が文頭に移動した文と解釈することも可能だが、文全体の内容(命題)がどの程度真理であるかどうかに対する話し手の態度表明、つまりモダリティーにおいて両表現は異なっている。

話題化文： ilwalad šufto imbāreḥ
the-boy-T (=O) saw-I-pro (O=T) yesterday

「その少年は、きのう私が見ました」

- 104) /ḥāḏra/ は動詞 /ḥaḏar/ 「存在する, 出席する」の能動分詞形 /ḥāḏer/ の女性単数形である。この /ḥāḏer/ は, 基本的に人間や生物の類が存在することを表しており, 特に能動分詞形の表現によって, どこからかやって来て今ここに存在することを含意する。詳細は, (XXVIII-1) を参照。
- 105) 「今」を意味する /halḥīn/ に指示接頭辞の /ha/ が常に用いられるのも, 同様の理由である。(XXIII-16) を参照。アラビア語におけるモダリティーについては, 西尾 (1990) も参照。
- 106) /halḥāḏra/ は能動分詞に定冠詞と指示接頭辞の /ha/ が付いた形だが, 指示接頭辞の /ha/ は形容詞や分詞 (能動・受動) 等にも接頭可能である。
- 107) ⑫のような文から話題の部分が省略された文として, /halḥāḏer ~ halḥāḏra/ 「ほら, (今ここに) いるよ」という表現も可能である。
- 108) (XXV-28) を参照。/hena/ も使われるが, カイロ方言からの借用と考えられる。
- 109) (XXV-28) を参照。この指示詞はジバーリ・アラビア語独特の単語で, 標準アラビア語や他のアラビア語方言には在証されず, 語源的にも不明である (Fischer 1959: 115ff.; Palva 1994: 280)。仮説ではあるが, nhāni <*nhā (=deictic element)+āni (=“I” ? cf. Hebrew: anī)。ジバーリ・アラビア語の nhā wi-nhā 「あちこち」(XXV-28) も参照。
- 110) (XXV-29) を参照。この指示詞もジバーリ・アラビア語独特の単語で, 標準アラビア語や他のアラビア語方言には在証されず, 語源的にも不明である (Fischer 1959: 115 ff.)。カイロ方言の影響から, 特に若年層の間では hnāk を使うようになってきている。
- 111) 日本語の場合のように聞き手に近い空間や聞き手と話し手の両者を基準とするような三分割ではない。ジバーリ・アラビア語の場合は, 話し手に近いか遠いかだけが問題になる。ジバーリ・アラビア語における場所の指示詞と空間認識については, 西尾 (1996) ならびに西尾 (2006) の第4章で詳しく分析した。
- 112) (XXV-30) を参照。
- 113) カイロ方言の Wh 疑問文の語順については, 西尾 (2005) の第1部第5章の議論を参照。
- 114) この文の場合, 目的語を文頭に移動させた話題化の文も可能である。

話題化文： inta mīn ḡarabku
you (sg.m.)-T (=O) who (=S) struck-you (sg.m.)-O
「あなた (について) は, 誰がなぐったか?」

- 115) 現代のジバーリ・アラビア語におけるこのような疑問文の語順は, おそらくカイロ方言の影響と考えられる。
- 116) (XXV-31) を参照。
- 117) カイロ方言の影響から, 三人称の独立代名詞の代わりに関係詞 /illi/ を使った構文が使われることもある。
- 例： eš illi btāklo
what (=O) rel. progressive-eat-you (sg.m.)-S-O (=what)
「あなたが食べているのは, 何か?」
- 118) 高階美行・大阪外国語大学教授のご教授によれば, 三人称複数形の独立形 /hummo/, /henne/ は /hum/, /hen-ne/ が再解釈されて成立し, 接尾形 /hum/, /hen/ もこれに由来するので, 共時的にはここで分析したように「接尾形」として扱うが, 通時的には「独立形」として単数形の場合と統一的な説明も可能である。
- 119) /eššī ḏi/ という表現も可能である。
- 120) (XXV-35) を参照。
- 121) /eš/ の位置は比較的自由で, 主語を話題化した次のような文も可能である。

話題化文： inta leš taḏḥak
you (sg.m.)-S why laugh (Impf. 2 sg.m.)
「あなた (男) は, なぜ笑っているのか?」

- 122) (XXV-34) を参照。
- 123) この疑問文でも疑問詞を前置詞といっしょに文頭へ移動させることが可能である。ただし, 実際には文頭へ移動しない疑問文の方が普通である。
- min wēn ḡīt
from where come (Pf. 2 sg.m.)
「どこから, あなた (男) は来たか?」

- 124) (XXV-36) を参照。
 125) (XXV-33) を参照。
 126) /izayyok/ 「ごきげんよう？」といった定型表現で用いられる。ちなみにジバーリ・アラビア語では同様の表現として、/kēf siḥhatku/ または /kēf ḥālok/ を用いる。
 127) /eš/ や /lēs/ と異なり、三人称の独立代名詞や /illi/ を使って文頭へ疑問詞を移動させた疑問文は非文法的となり、生起しない。これは、他の /wēn/ や /mitēn/ などの副詞的な要素の疑問詞も同様である (cf. *kēf illi tsawwi šāy)。
 128) (XXV-32) を参照。
 129) (XXV-37) を参照。
 130) (XXV-38) を参照。
 131) (XXV-39) を参照。
 132) 女性形語尾の /-e/ (イダーファで [-et] ~ [-et]) は音声環境 (アクセントのない開音節) によって母音脱落が起きるのに対して、/a/ (イダーファで [-at] ~ [-at]) は母音が脱落しない。例: /maratēn (du.)/ 「女 (双数形)」 (VII-3) (← /marat+ēn/) cf. /mara/ (単数形)。
 133) 双数形と数詞が組み合わされる場合もあり、ただ二つしかないことが強調されるようである。例: /zalamtēn/ 「二人の男」 vs. /zalamtēn iḥnēn/ 「ちょうど二人の男」 (XXIV-3)。
 134) 強調音 (咽頭化音)、口蓋垂音 (/ɣ/, /g/), 咽頭音 (/h/, /ʕ/), および /r/ の後に来る場合は、語末の母音が脱落しない傾向にある。例: /bagara/ 「牛」 /bagaratēn/ ← /bagarat+ēn/。
 135) 以下のような例外もあるが、カイロ方言形の影響と考えられる。例: /fāḍi (sg.m.)/ → /fāḍyīn (pl.m.)/ 「からの」 (XXII-27)。ちなみに、語末母音が /i/ で終わっていても上記のような語構成でない場合は、以下の例のように複数形語尾の前に /y/ が挿入される。例: /ḡani (sg.m.)/ → /ḡaniyīn (pl.m.)/ 「金持ちの、富んだ」 (VIII-22); /badawi (sg.m.)/ → /badawiyīn (pl.m.)/ 「遊牧民」 (VIII-41)。
 136) /ħorme (sg.)/ → /ħoromme ~ ḥarīm (pl.)/ 「女」 (VII-3) の場合は、*gahawa* シンドロームのために母音が挿入された結果である。
 137) /ḡoḥor (sg.)/ → /ḡḥōr ~ ḡḥerra (pl.)/ 「穴」 (XX-6) のような例外もある。
 138) /ḡaḏeb (Pf.)/ 「怒る」 (XVI-22) も参照。cf. 三人称単数女性形 =/ḡaḏbet/, 二人称単数男性形 =/ḡaḏebt/。
 139) 基本的に第1語根子音ならびに第2語根子音が上記の子音である場合である。cf. /kibir/ 「大きくなる」 (XX-14)。
 140) /rozog (Pf.)/ の場合、通時的には完了形の受動形からの発展形と考えられる。/rozog/ <*/ruziqa/ (cf. Cl.A /razaqa/ = 「授ける」)。また、/soḡor (Pf.)/ の場合は古典アラビア語において語幹母音に /u/ を持つ動詞であるが (cf. Cl.A /saḡura/), ジバーリ・アラビア語において C₁uC₂uC₃ (あるいは C₁oC₂oC₃) パターンを持つ動詞のなかで、古典アラビア語で語幹母音 /u/ を持つ動詞は、/soḡor (Pf.)/ のみであり、他の同様の動詞はジバーリ・アラビア語では基本的に C₁iC₂iC₃ (あるいは C₁eC₂eC₃) パターンとなっている。例: /kibir/ 「大きくなる」 (XX-14) <*/kabura/; /kiḥir/ 「増える」 (XXIV-78) <*/kaḥura/。
 141) 異音の [e] で現れる場合もこのパターンに含まれる。
 142) 異音の [o] で現れる場合もこのパターンに含まれる。
 143) 北西アラビア半島方言 (North-west Arabian Dialects または North West Arabian Dialects) については、Palva (1991) を参照。同方言のなかでも東部グループに属する方言では、接頭辞の母音は /a/ が一般的になっている (Palva 1991: 161)。
 144) ジバーリ・アラビア語分類語彙集にあげた強調動詞 (総数 132) のなかで、50% が①のパターンで、15% が②のパターン、34% が③のパターンである (残りは、母音調和が起らない場合である)。尚、この統計では *gahawa* シンドロームの動詞は除外した。
 145) /yʿašer (Impf.)/ という *gahawa* シンドロームによる音節構造の変化による活用形も在証される。
 146) この動詞の場合、第2語根子音の影響によって母音 /a/ に変化したと考えられる。また、接頭辞母音に /i/ を若年層で多用する傾向にあるのは、カイロ方言の影響である。
 147) これらの動詞の未完了形一人称単数の場合は、接頭辞 /a-/ の活用形よりも母音調和による形式の方がより普通の形式である。
 148) 未完了形に前接して継続や進行を示す接頭辞 /b(i)-/ が未完一人称単数形と使われる場合、通常は接頭辞の母音が生起するが、弱動詞の場合は、強勢のない開音節になるために母音の脱落が起ることもある。たとえば、/orgoṣ (Impf. 1 sg.)/ cf. /ragāṣ (Pf.)/ /yorgoṣ (Impf.)/ 「踊

- る」(XI-4) の場合は、/borgos/ ← /b+orgos/ となるが、/ogül (Impf. 1 sg.)/ cf. /gäl (Pf.)/ ygül (Impf.)/ 「言う」(X-6) の場合は、/bgül/ ← /b+ogül/ となる。
- 149) 第1語根の子音が /χ/ で、接頭辞母音および語幹母音が /o/ (~ /u/) となる場合は、未完了形になっても *gahawa* シンドロームによる母音挿入が起らない。例：/yoχroğ (Impf.)/ 「出る」(IX-7)；/yoχlos (Impf.)/ 「終わる」(XV-4)。ただし、どちらの例もカイロ方言からの借用形である可能性が高い。また、例外である /yaχla' (Impf.)/ 「脱ぐ」(II-3) の場合は、標準アラビア語からの借用形の可能性が高い。
- 150) /ya'ser (Impf.)/ という通常の形式も在証される。また、/ya'ref (Impf.)/ 「知る、知っている」(XVI-2) の場合のように、*gahawa* シンドロームによる未完了形が在証されない動詞もある。/ya'aðer ~ yo'dor (Impf.)/ 「謝る」(XIII-6) の場合のように、接頭辞母音および語幹母音の /o/ (~ /u/) による自由交替形がある動詞もある。
- 151) /yu'tos (Impf.)/ という通常の形式も在証される。
- 152) 完了形 $C_1aC_2aC_3$ > 未完了形 $yaC_1C_2iC_3$ 、完了形 $C_1aC_2aC_3$ > 未完了形 $yiC_1C_2aC_3$ という組み合わせパターンも在証されるが、すでに見たように、ジバリー・アラビア語における接頭辞母音と語幹母音が母音調和しない未完了形のパターンは、カイロ方言等からの借用形式である可能性が高く、極めて少数の例しか在証されないので、ここでの議論では扱わないことにする。
- 153) 未完了形における接頭辞母音と語幹母音が母音調和しない例においても、この音声環境では語幹母音が /a/ となる。例：/zahaf (Pf.)/ → /yizhaf (Impf.)/ 「這う」(IX-20)。
- 154) 第3語根子音が /h/ の場合の例外として、/nabaħ (Pf.)/ → /yinbeħ (Impf.)/ 「(犬が) 吠える」(XIX-71) がある。
- 155) /ʔ/ が第1語根子音となる場合にも、未完了形 $yaC_1C_2aC_3$ をとる傾向にあるが、例外もある。例：/ʔawağ (Pf.)/ → /ya'wağ (Impf.)/ 「曲げる」(XIV-41)；/ʔataš (Pf.)/ → /ya'taš (Impf.)/ 「のどが渇く」(III-53)。例外：/ʔaraf (Pf.)/ → /ya'ref (Impf.)/ 「知る、知っている」(XVI-2)。これらの場合、併用する日常語彙が別にあることが多く、標準アラビア語に影響を受けた可能性が高い。また、/baħas (Pf.)/ → /yabħas (Impf.)/ 「脱ぐ」(II-3)；/tafal (Pf.)/ → /yatfal (Impf.)/ 「つばを吐く」(III-51)；/šaħaz (Pf.)/ → /yašħaz (Impf.)/ 「燃やす」(IV-29)；/faðal (Pf.)/ → /yafðal (Impf.)/ 「残る」(IX-5) などの例外も同様の理由による可能性が高い。
- 156) /ʔaraf (Pf.)/ → /ya'ref (Impf.)/ 「知る、知っている」(XVI-2) や /ʔagad (Pf.)/ → /ya'ged (Impf.)/ 「結ぶ」(XIV-44) の場合のように、第1語根子音が咽頭摩擦音の /ʔ/ のときは接頭辞母音が /a/ となる。また、第1語根子音が /h/ のときは *gahawa* シンドロームにより、母音挿入が起るが、同じような理由で接頭辞母音が /a/ となる。例：/ħamad (Pf.)/ → /yahamed (Impf.)/ 「押える」(XIV-14)。
- 157) /sarag (Pf.)/ → /yisrig (Impf.)/ 「盗む」(VIII-25) や /daras (Pf.)/ → /yidris (Impf.)/ 「習う、勉強する」(XVI-8) のような例外もあるが、これらの場合は標準アラビア語の影響の可能性が高い。
- 158) /sakat (Pf.)/ → /yuskut (Impf.)/ 「黙る」(X-7) のような例外もあるが、これらの場合は標準アラビア語の影響の可能性が高い。
- 159) 音声学的には、次のように接頭辞母音と語幹母音が [o] で現れていることからわかるように、強調音化 (/r/ 音も強調音化される傾向にある) が音節を超えて影響を与えているためである。
- 160) ジバリー・アラビア語において完了形 $C_1iC_2iC_3$ のパターンを取る動詞は基本的に、標準アラビア語 (あるいは古典アラビア語) において、語幹母音が /i/ である完了形 $C_1aC_2iC_3a$ のパターンを取る動詞である。
- 161) 例外として、/kiθir (Pf.)/ → /yukθor (Impf.)/ 「増える」(XXIV-78)、などがある。この場合、通時的には /kiθir (Pf.)/ < * /kaθura (Pf.)/ と考えられるから、対応する未完了形は語幹母音 /u/ を含んだ完了形から派生したと仮定できる。その共時的な証拠として、/kibir (Pf.)/ 「育つ」(VI-5) または「生える」(XVIII-17) (cf. < * /kabura (Pf.)/) の場合のように、/yakbar (Impf.)/ と /yukbor (Impf.)/ という二つの未完了形を持つ動詞が在証されることや、/χološ (Pf.)/ → /yoχloš (Impf.)/ 「終わる」(XV-4) (< * /χalaš (Pf.)/) の場合のように、カイロ方言からの借用形と考えられる /χiliš (Pf.)/ → /yaχlaš (Impf.)/ という組み合わせと併用される動詞が在証されることなどから、④の組み合わせにおける例外は、異なった語幹母音の動詞に対応する未完了形の古い形式が残存している、あるいは新たな形式が採用されつつある状況を反映していると理解できる。

- 162) 例外として, /rozog (Pf.) / → /yarzag (Impf.) / 「子供を授かる」(VI-2) があるが, この場合前注でも指摘したように, 通時的には完了形の受動形からの発展形と考えられ (/rozog / < * / ruziqa / cf. Cl.A / razaqa = 「授ける」), 対応する未完了形についても, 受動形からの発展形を想定できるかもしれない (/yarzag / < * / yurzaqu /). あるいは, /kereh ~ koroh (Pf.) / → /yakrah (Impf.) / 「嫌う」(XVI-15) の場合から推量されるように, /rezeg ~ rozog (Pf.) / という交替形が以前の段階に想定できるかもしれない。
- 163) 最初の母音に強勢が置かれられない場合, シューワ母音となることがある (例: [æktibi]).
- 164) 接頭辞の長母音の /ō/ は, 特に第2語根が強調音である場合, 音声学的には二重母音となる。例: /yōsal / → [yoōsal] (/yōga' (Impf.) / 「転ぶ」(XV-10) → [yoōga'] も参照)。
- 165) 他の例として, wagad (Pf.) / yōgad (Impf.) 「燃やす」(IV-29), waḡa' (Pf.) / yōḡa' (Impf.) 「痛くする」(VI-18), warad (Pf.) / yōrid (Impf.) 「近づく」(IX-3), wa'ad (Pf.) / yō'ed (Impf.) 「約束する」(X-11), wazan (Pf.) / yōzen (Impf.) 「(重さを)量る」(XXIV-72) も参照。
- 166) wagaf (Pf.) / yōgaf (Impf.) 「止まる」(IX-14) も参照。
- 167) 命令形の活用形のなかで, 単数形については /egef / と /egefi / の方が古い形式だが実際にはよく使われ, 長母音 /ō/ を含んだ形式の方がより新しい形式である。
- 168) 他の例として, wili' (Pf.) / yōla' (Impf.) 「燃える」(IV-28) も参照。
- 169) 強勢は, 完了形 (三人称単数) では最初の音節に, また未完了形では接頭辞母音の音節に置かれる。
- 170) 第1語根子音の /w/ が脱落した活用形の方がより古い形式である。
- 171) 意味上の制限から女性形のみが在証される。cf. * /wilid (Pf. 3 sg.m.) /。
- 172) cf. Cl.A / aḡaḡa /。
- 173) 命令形の異形態のなかで, カイロ方言の影響からか, /ḡoḡ / による活用の方がより多く使われ, 特に若年層で好まれる。/oḡoḡ / による活用の方がより古い形式と言えるが, 男性単数形の場合のみ, /ḡoḡ / よりも /oḡoḡ / の方が, 若年層と老年層を問わずどちらにもより好んで使われる傾向にある。
- 174) 未完了形の活用で, 強勢のない開音節に生起する語幹母音が脱落することに注意。
- 175) 命令形の異形態のなかで, /okul / よりも /kul / の方が新しい形式である。/kul / についても /ḡoḡ / の場合と同様に, カイロ方言からの影響と考えられる。
- 176) 若年層は未完了形と命令形についてカイロ方言の影響からか, 以下の活用を好んで使う傾向にある。
- | Impf. | sg. | pl. | Impr. | sg. | pl. |
|-------|--------|---------|-------|-------|--------|
| 3 m. | yōmor | yōmoru | m. | ōmor | ōmoru |
| 3 f. | tōmor | yōmoren | f. | ōmori | ōmoren |
| 2 m. | tōmor | tōmoru | | | |
| 2 f. | tōmori | tōmoren | | | |
| 1 | ōmor | nōmor | | | |
- 177) 他の例として, ḡā' (Pf.) / yḡū' (Impf.) 「腹がへる」(III-52), ḡāḡ (Pf.) / yḡūḡ (Impf.) 「舌で嘗める」(III-44), ṣām (Pf.) / yṣūm (Impf.) 「断食する」(III-48), ḡām (Pf.) / yḡūm (Impf.) 「起きる」(IV-41), māṭ (Pf.) / ymūt (Impf.) 「死ぬ」(VI-26), rāḡ (Pf.) / yrūḡ (Impf.) 「行く」(IX-1), bās (Pf.) / ybūs (Impf.) 「キスをする」(XIII-13), zār (Pf.) / yzūr (Impf.) 「訪問する」(XIII-22), dās (Pf.) / ydūs (Impf.) 「踏む」(XIV-21), 'ām (Pf.) / y'ūm (Impf.) 「浮く」(XVII-50), fāt (Pf.) / yfūt (Impf.) 「過ぎる」(XXIII-2) も参照。
- 178) 命令形の異形態のなかで, /ogol / (~ /gol /) がより古い形式であり, /gūl / による活用形は若年層のあいだで好んで使われる傾向にある。ḡām (Pf.) / yḡūm (Impf.) 「起きる」(IV-41) の命令形 /gom ~ gūm ~ ugūm (Impr. sg.m.) /, zār (Pf.) / yzūr (Impf.) 「訪問する」(XIII-22) の命令形 /ozor ~ zūr (Impr. sg.m.) / の例も参照。
- 179) 一人称単数の未完了形の接頭辞母音も, /b(i)- / などの他の接頭辞が付けられ開音節になると, 脱落する。/bgūl / ← /b(i)+ogūl / 「私は言っている」cf. /biyḡūl /, /bitḡūl /, /bingūl / etc.
- 180) ジバリー・アラビア語では, ra'a (Pf.) / yer'i (Impf.) 「見(え)る」(I-73) がより古い形式であり, ṣāf (Pf.) / yṣūf (Impf.) 「見(え)る」(I-73) はカイロ方言あるいは地域共通方言形として, 使用が一般的になりつつある。rawwah (Pf.) / yrawwah (Impf.) 「行く」(IX-1) と rāḡ (Pf.) / yrūḡ (Impf.) 「行く」(IX-1) の関係も同様であり, 前者がより古い通常使う形式で, 後者はカイロ方言形あるいは地域共通方言形として一般的になりつつある。cf. /arūḡ (Impf. 1 sg.m.) /。

- 181) 他の例として, *bāt* (Pf.) / *ybit* (Impf.) 「泊まる」 (IV-48), *tāb* (Pf.) / *yṯb* (Impf.) 「治る」 (VI-23), *ḏā'* (Pf.) / *yḏī'* (Impf.) 「なくなる」 (XIV-24), *sāh* (Pf.) / *ysīh* (Impf.) 「下りる」 (XV-15), *hāṣ* (Pf.) / *yhiṣ* (Impf.) 「うるさくする」 (XVII-29), *tār* (Pf.) / *yṯr* (Impf.) 「飛ぶ」 (XIX-69), *bāḏat* (Pf. 3 sg.f.) / *tbīḏ* (Impf. 3 sg.f.) 「(卵を) 産む」 (XIX-72), *gās* (Pf.) / *ygīs* (Impf.) 「測る」 (XXIV-73), *zād* (Pf.) / *yzīd* (Impf.) 「増える」 (XXIV-78) も参照。
- 182) 同様の例は, *bā'* (Pf.) / *ybi'* (Impf.) 「売る」 (XII-3) でも確認される (cf. /*ebi'* (Impf. 1 sg.)/)。
- 183) 通常は以下の命令形を使う。

Impr.	sg.	pl.
m.	<i>hāt</i>	<i>hātu</i>
f.	<i>hāti</i>	<i>hāten</i>

- 184) *sāl* (Pf.) / *yšīl* (Impf.) 「運ぶ」 (IX-22) の命令形 /*sil*/ についても短縮形の語頭母音が脱落したと考えられる。
- 185) *ra'a* (Pf.) / *yer'i* (Impf.) 「見(え)る」 (I-73) も参照。cf. Cl.A /*ra'ā*/。
- 186) cf. Cl.A /*sa'ala*/。
- 187) 他の例として, *ra'a* (Pf.) / *yer'i* (Impf.) 「見(え)る」 (I-73), *bake* (Pf.) / *yibki* (Impf.) 「泣く」 (I-78), *gale* (Pf.) / *yigli* (Impf.) 「煮る, 沸かす」 (III-38), *šawe* (Pf.) / *yīšwi* (Impf.) 「焼く」 (III-39), *bane* (Pf.) / *yibni* (Impf.) 「建てる」 (IV-4), *maḏa* (Pf.) / *yimḏi* (Impf.) 「サインする」 (X-29), *rame* (Pf.) / *yirmi* (Impf.) 「投げる」 (XIV-6), *sara* (Pf.) / *yisri* (Impf.) 「早起きする」 (XXIII-4) も参照。
- 188) 第3語根が /y/ である弱動詞の派生形についても同様のことが当てはまる。例: *warra* (Pf.) / *ywarri* (Impf.) 「見せる」 (XIV-29) cf. /*twarr* (Impf. 2 sg.m.)/ ; *štara* (Pf.) / *yīštiri* (Impf.) 「買う」 (XII-4) cf. /*tištir* (Impf. 2 sg.m.)/。
- 189) この例では, 完了形 C_iC_i の活用形がカイロ方言からの影響から併用されるようになってきている。特に若年層ではこの傾向が強い。
- 190) 他の例として, *ḏame* (Pf.) / *yaḏma* (Impf.) 「のどが渴く」 (III-53), *male* (Pf.) / *yamla* (Impf.) 「(時計を) 巻く」 (XIV-43), *ra'a* (Pf.) / *yar'a* (Impf.) 「放牧する」 (XIX-75) も参照。
- 191) 他の例として, *sihi* (Pf.) / *yaṣha* (Impf.) 「目が覚める」 (IV-40), *šefi* (Pf.) / *yašfa* (Impf.) 「治る」 (VI-23), *ligi* (Pf.) / *yalga* (Impf.) 「見つける」 (XIV-28), *rigi* (Pf.) / *yarga* (Impf.) 「上がる」 (XV-13) も参照。
- 192) *ra'a* (Pf.) / *yer'i* (Impf.) 「見(え)る」 (I-73) の未完了形の一人称単数形 /*er'i* (Impf. 1 sg.m.)/, *rame* (Pf.) / *yirmi* (Impf.) 「投げる」 (XIV-6) の未完了形の一人称単数形 /*ermi* (Impf. 1 sg.m.)/ も参照。
- 193) すでに指摘したように, 未完了形の一人称単数形の接頭辞母音に /a/ を一般的に使うようになっているのは, カイロ方言の影響からであり, 特にこの動詞の場合は, 完了形においてもカイロ方言形が一般的になりつつある。

Pf.	sg.	pl.
3 m.	<i>ḡeri</i>	<i>ḡeryu</i>
3 f.	<i>ḡeryet</i>	<i>ḡeryen</i>
2 m.	<i>ḡrīt</i>	<i>ḡrītu</i>
2 f.	<i>ḡrīti</i>	<i>ḡrīten</i>
1	<i>ḡrīt</i>	<i>ḡrīne</i>

- 194) 他の例として, *ḡadi* (Pf.) / *yagadi* (Impf.) 「なる」 (XXVIII-3) も参照。
- 195) /*mala* (Pf.)/ (「いっぱいにする」 (XXII-26) <*/*mala'a*/) と /*male* (Pf.)/ (「(時計を) 巻く」 (XIV-43) <*/*malā*/) の音韻対立を見ると, 語末の /l/ (ハムザ) を基底表示には想定できるかもしれない。
- 196) 他の例として, *bada* (Pf.) / *yabda* (Impf.) 「始める」 (XV-3), *mala* (Pf.) / *yamla* (Impf.) 「いっぱいにする」 (XXII-26) も参照。
- 197) 例外として, *ḥall* (Pf.) / *yhall* (Impf.) 「放す」 (XIV-5) という例が在証されるが, 借用形である可能性が高い。cf. *ḥall* (Pf.) / *yḥill* (Impf.) 「ほどく」 (XIV-46)。
- 198) 他の例として以下も参照。 *gaḥḥ* (Pf.) / *ygoḥ ḥ* (Impf.) 「せきをする」 (I-21), *šaḫḫ* (Pf.) / *yšoḫḫ* (Impf.) 「小便をする」 (I-52), *maṣṣ* (Pf.) / *ymoṣṣ* (Impf.) 「すう」 (III-49), *šabb* (Pf.) / *yšoḫḫ* (Impf.) 「注ぐ」 (V-14), *dagg* (Pf.) / *ydogg* (Impf.) 「(かなづちで) たたく, 打つ」 (V-20), *ḥakk* (Pf.) / *yhokk* (Impf.) 「掻く」 (VI-20), *ṯaḫḫ* (Pf.) / *yṯoḫḫ* (Impf.) 「(銃で) 撃つ」 (VI-51), *ḏabb* (Pf.) / *yḏobb* (Impf.) 「抱く」 (VII-5), *ḫašš* (Pf.) / *yḫošš* (Impf.) 「入る」 (IX-8), *marr* (Pf.) /

- ymorr (Impf.) 「通る」(IX-26), ḡabb (Pf.) / yḡobb (Impf.) 「抱く」(XIII-12), ‘aḡḡ (Pf.) / y‘oḡḡ (Impf.) 「かむ」(XIV-1), laṭṭ (Pf.) / yloṭṭ (Impf.) 「触る」(XIV-10), ḡakk (Pf.) / yḡokk (Impf.) 「こする」(XIV-11), zagg (Pf.) / yzogg (Impf.) 「押す」(XIV-13), ḡarr (Pf.) / yḡorr (Impf.) 「引っ張る」(XIV-15), ḡaṭṭ (Pf.) / yḡoṭṭ (Impf.) 「置く」(XIV-30), fakk (Pf.) / yfokk (Impf.) 「ほどく」(XIV-46), gazz (Pf.) / ygozz (Impf.) 「刺す」(XIV-52), bazz (Pf.) / ybozz (Impf.) 「刺す」(XIV-52), zatt (Pf.) / yzoṭṭ (Impf.) 「すべる」(XV-9), natt (Pf.) / ynoṭṭ (Impf.) 「跳ねる, 跳ぶ」(XV-12), ṭabb (Pf.) / yṭobb (Impf.) 「下りる」(XV-15), ḡabb (Pf.) / yḡobb (Impf.) 「(風が) ぶく」(XVII-27), ḡaṣṣ (Pf.) / yḡoṣṣ 「(動物の毛を) 刈る」(XIX-58)
- 199) 語幹母音が /i/ となる例として, ṣamm (Pf.) / yṣimm (Impf.) 「嗅ぐ」(I-75), ḡadd (Pf.) / yḡedd (Impf.) 「やぶる」(II-16), taḡṭ (Pf.) / ytiṭṭ (Impf.) 「つばを吐く」(III-51), kabb (Pf.) / ykibb (Impf.) 「こぼす」(V-15), sann (Pf.) / ysinn (Impf.) 「研ぐ」(V-27), ḡaṣṣ (Pf.) / yḡiṣṣ (Impf.) 「草を与える」(VIII-43), laḡṭ (Pf.) / yliṭṭ (Impf.) 「曲がる」(IX-9), ḡall (Pf.) / yḡell (Impf.) 「迷う」(IX-12), ḡazz (Pf.) / yḡizz (Impf.) 「振る」(XIV-12), daḡḡ (Pf.) / ydiḡḡ (Impf.) 「押す」(XIV-13), daṣṣ (Pf.) / ydiṣṣ (Impf.) 「かくす」(XIV-25), laḡṭ (Pf.) / yliṭṭ (Impf.) 「包む」(XIV-31), lamm (Pf.) / ylimm (Impf.) 「集める」(XIV-36), ḡadd (Pf.) / yḡidd (Impf.) 「裂く」(XIV-40), ḡall (Pf.) / yḡill (Impf.) 「感じる」(XVI-10), ḡabb (Pf.) / yḡibb (Impf.) 「愛する」(XVI-13), mall (Pf.) / ymell (Impf.) 「あきる」(XVI-16), ‘add (Pf.) / y‘idd (Impf.) 「数える」(XXIV-1), ḡall (Pf.) / yḡill (Impf.) 「減る」(XXIV-79) も参照。
- 200) 共通方言形である, ṣāf (Pf.) / yṣūf (Impf.) 「見(え)る」(I-73) も実際にはよく使われる。
- 201) カイロ方言からの借用形である, baṣṣ (Pf.) / yboṣṣ (Impf.) 「見る」(I-74) も若年層でよく使われる。
- 202) これらの分類はかならずしも明確な言語学的(あるいは方言地理学的な)基準によるものではなく, 地理的な観点からの地域方言の呼称である (Versteegh 1997: 145)。
- 203) 定住民方言に共通して見られる特徴の起源を説明するために, フェーガンソンはコイネー理論を提唱した (Ferguson 1959)。コイネー理論によれば, アラブ人による大征服の初期の段階において, 征服地に建設された軍事都市(ミスルと呼ばれる)や彼らが移住した既存の都市で, アラビア半島出身の兵士たちの異なった部族方言が混じり合った結果として, コイネー(共通語)が生まれ, 基層言語の影響も受けながら, 次第に各地域の中心都市に定住民方言が形成されたとされる。彼のコイネー理論の根拠となった定住民方言の共通特徴は以下の通りである。
- (1) 動詞・代名詞の双数形の消失
 - (2) 未完了形の接頭辞母音の /a>/i/ への変化(アラブ古典文法の *taṭṭala* 現象)
 - (3) 第3語根が /w/ と /y/ の動詞の区別の消失
 - (4) 重子音動詞(C₂=C₃動詞)の活用の変化(第3子音が弱子音のII形と同じになる)
 - (5) 前置詞 /li-/ 「～へ, ～のために」が動詞に後接化
 - (6) 3～10の数詞と名詞の間に見られる性の逆転現象の消失
 - (7) 13～19の数詞の子音 /t/ の強調音化
 - (8) 比較形の女性形 *fu‘alā* の消失
 - (9) 形容詞の複数形の変化: *fi‘al>fu‘āl*
 - (10) ニスバ形式の変化: *-yy>-i*
 - (11) /ḡā‘a bi-/>/ḡāb/ 「持ってくる」の生成
 - (12) /ra‘ā/ 「見る」の代わりに /ṣāf/
 - (13) 語変化しない関係詞 /illi/ の使用
 - (14) 音素 /θ/ と /d/ の融合
- コイネー理論に対しては, 言語拡散の中心となる強力な中心地が歴史上存在しなかったことから, 仮にコイネーの存在を認めるにしても複数の中心でコイネーが生まれ拡がったという修正コイネー理論が出された (Cohen 1970)。また, 現代都市部定住民方言間に観察される共通特徴は, 各方言の基盤となった古代アラビア語諸方言が全体的に共有していた変化の方向がそのまま顕現したものであり, さらに長期間にわたる方言間の相互接触や古典アラビア語からの影響によって均質化されたものとみなせる (Blau 1977)。これを受けてフェルステグによって提唱されたピジン・クレオール理論 (Versteegh 1984) とその問題点については, 西尾 (2005) の特に第1部第3章を参照。
- 204) ジバリー・アラビア語の場合, 典型的な遊牧民方言の特徴は有しているものの, それ以外の諸特徴については, (3), (6), (7), (12) の特徴が部分的に当てはまるだけである。

- 205) 例えば、西暦11世紀に起ったスライム部族やヒラール部族のアラビア半島から北アフリカへの大移住の結果、アラビア半島方言が拡散されることとなった。
- 206) アラブ遊牧部族の地理的移動および部族編成の歴史の変遷については、Nishio et al. (1999)を参照。歴史的には定住民の遊牧化やその反対に遊牧民の定住化が頻繁に起っており、地域ごとの定住民方言と遊牧民方言の分布はさらに複雑になる。
- 207) 歴史的にはスライム部族がアラビア半島から移住した地域である。
- 208) 歴史的にはヒラール部族がアラビア半島から移住した地域である。
- 209) 都市部の定住民方言に比べて、農村部の定住民方言（あるいは半定住半遊牧民方言）や沙漠地帯の遊牧民方言はあまり調査がおこなわれていない。特にアラビア半島からシナイ半島にかけての地域は、アラビア方言学において極めて重要性が高いにも関わらず、言語データの面で未だに空白地帯が多いのが現状である。
- 210) 北東アラビア半島方言はさらに三つの下位方言群に分けられる。アニザ部族方言（クウェート方言、バハレーンのスンニー派方言、湾岸諸国方言も含まれる）、シャンマル部族方言（いくつかのイラクの遊牧民方言も含まれる）、シリア・メソポタミア地域の遊牧民方言（イスラエル北部およびヨルダンの遊牧民方言も含まれる）である。
- 211) バハレーンのシーア派方言も含まれる。
- 212) 北西アラビア半島方言の東部と西部のグループを分ける特徴としては他にも、長母音の /ō/ と /e/ が安定しているかどうか（東方言では安定しているが、西方言では [ō]~[ū], [ē]~[ī] のようにゆれが見られる）、名詞の女性形語尾にイマーラ現象（長音位置が狭くなる音声変化）が見られるかどうか、三人称単数の接尾代名詞の男性形と女性形の組み合わせパターンなどの点でも異なっている（Palva 1991: 157）。ジバーリ・アラビア語は、長母音が音声的には不安定であることや、女性形語尾にイマーラ現象が見られることなどから、西部グループの特徴を有しているが、三人称単数の接尾代名詞（特に男性形）のパターンは北西アラビア半島方言という遊牧民方言よりも定住民方言に近く、西部グループの中でも特異な位置にあると言える。
- 213) /g/ と /k/ の破擦音化については、西尾（2003）を参照。
- 214) ネゲブ沙漠の遊牧民方言が使用する /b(i)/+ 未完了形の意味は、シリア・パレスチナ地域の定住民方言の類似表現に近い（Blanc 1970: 139）、シナイ半島南部の方言ではエジプト方言（カイロ方言）に近い。
- 215) 定住民方言との言語接触による遊牧民方言の言語的同化現象のプロセスについては、西尾（2003）を参照。
- 216) 未完了形における語幹母音と接頭辞母音の母音調和は、リビアやチェルニシアの遊牧民方言でも確認されているが、これらの方言は北西アラビア半島方言と何らかの歴史的関係がある可能性が高い（Fischer and Jastrow 1980: 261）。
- 217) イスラム以前の古代アラビア語については、必ずしも古典アラビア語のように未完了形の接頭辞母音が /a/ で語幹母音が /a/~/i/~/u/ のいずれかと組み合わせざったわけではなく、西部グループの場合に似て、接頭辞母音 /a/ と語幹母音 /a/ が必ず組み合わせパターンとなる方言があったことが報告されている（Rabin 1951: 61, 158）。
- 218) グループIIの地域に属する方言でも、ドウェーグリ部族の場合のように隔絶した特徴を持つ方言もある。この部族は、伝統的なアラブの部族関係システムにおいて「フタイム」と称される社会的位置にある部族であり、他の近隣部族とは社会的交渉においても孤立する傾向が強い。フタイムについては、西尾（2006）の第2章7節の議論も参照。
- 219) 南シナイ方言全体に関する記述研究は乏しく、ここでの議論は主として筆者の予備調査によるデータに基づく。
- 220) 歴史的には、紅海やアカバ湾を越えての海からの進入も見られ、方言の点でも特に語彙面では、ナイル川南部の上エジプト地域の方言と共通する場合もある。シナイ半島南部における部族編成の歴史については、西尾（2006）の第2章の議論を参照。
- 221) /b(i)/+ 未完了形が比較的多用されることや、遊牧民方言としての *gahawa* シンドロームが顕著であること、さらに言えば、南シナイ方言にきわだって特徴的な二人称単数男性形の接尾代名詞 /-ku/ ([^hʔ]-[^hku]) の存在も、南シナイ地域を構成する部族方言の起源と関係する可能性が高い。
- 222) ヨングは西尾（1992）によるジバーリ・アラビア語の方言データをもとに、北シナイ方言のグループI・II・IIIと南シナイ方言の比較分析をした結果、同様の結論を述べている（de Jong 2004: 173-175）。

- 223) ジバリー・アラビア語の空間表現と言語の起源の問題に関する詳しい議論については、西尾(2006)の第4章を参照。
- 224) 民族的あるいは集団的アイデンティティーである言語的指標保持のための言語的同化と異化をめぐる議論については、西尾(1991)の議論を参照。
- 225) 最近では、イスラエルによる占領下でジバリー部族は行政当局に協力的で、他の部族にくらべて友好的な関係を維持しており、事実多くのジバリー部族の人びとが招待されたり、商用などでイスラエルを訪問している。エジプト返還後は、政府によって観光地化が促進されたために、遊牧民の就労の機会が増えた反面、都市的な物質文化の急激な流入により、観光ベドウィンなるグループが登場するなど、ジバリー部族を含めた南シナイの遊牧民たちの生活はかつてないほどに定住民の影響を受けている。19世紀から20世紀にかけての南シナイ地域における社会経済的变化と遊牧民の生業形態の変容については、西尾(2006)の第6章を参照。
- 226) ジバリー・アラビア語が他の南シナイの遊牧民方言に比べても定住民方言の特徴を多く持っているのは、借用関係に起因するのはもちろんだが、都市部の定住民方言自体がその形成の初期段階においてピジン・クレオール的過程を経たという仮説を考慮すれば、まったく別の考え方も可能であろう(Versteegh 1984)。

文 献

Blanc, Haim

- 1967 The 'sonorous' vs. 'muffled' distinctions in Old Arabic phonology. *To Honor Roman Jakobson I*, pp. 295–300. The Hague: Mouton.
- 1969 The fronting of Semitic *g* and the *qāl-gāl* dialect split in Arabic. *Proceedings of the International Conference on Semitic Studies*, pp. 7–37.
- 1970 The Arabic dialect of the Negev Bedouins. *The Israel Academy of Sciences and Humanities Proceedings* 4 (7): 112–150.

Blau, Joshua

- 1960 *Syntax des palästinensischen Bauerndialekts von Bīr-Zēt*. Walldorf-Hessen: Verlag für Orientkunde.
- 1977 *The Beginning of the Arabic Diglossia: A Study of the Origins of Neo-Arabic*. Malibu: Undena.

Cohen, David

- 1970 Koinè, langues communes et dialects arabes. In David Cohen, *Etudes de linguistique sémitique et arabe*, pp. 105–125. The Hague and Paris: Mouton.

de Jong, Rudolf E.

- 1996 Examples of leveling and counterreactions in the dialects of Bedouin tribes in Northwestern Sinai. *Egypt/Monde Arabe* 27-28: 355–382.
- 2000 *A Grammar of the Bedouin Dialects of the Northern Sinai Littoral Bridging the Linguistic Gap between the Eastern and Western Arab World*. Leiden/Boston/Köln: Brill.
- 2004 Characteristics of Bedouin dialects in Southern Sinai: Preliminary observations. In Martine Haak, Rudolf de Jong and Kees Versteegh (eds) *Approaches to Arabic Dialects: A Collection of Articles presented to Manfred Woidich on the Occasion of his Sixtieth Birthday*, pp. 151–175. Leiden/Boston: Brill.

Doss, Madiha

- 1979 The position of the demonstrative *da, di* in Egyptian Arabic: a diachronic inquiry. *Annales Islamiques* 15: 349–357.

Ferguson, Charles A.

- 1959 The Arabic koine. *Language* 25: 616–630.

Fischer, Wolfdietrich

- 1959 *Die demonstrativen Bildungen der neuarabischen Dialekte*. The Hague: Mouton.

Fischer, Wolfdietrich and Otto Jastrow

- 1980 *Handbuch der arabischen Dialekte*. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.

- Fleisch, Henri
 1958 Maǧhūra, mahmūsa, examen critique. *Mélanges de l'Université Saint Joseph* 35: 193–210.
- Grotzfeld, Heinz
 1964 *Laut- und Formenlehre des Damaszenisich-Arabischen*. Wiesbaden: Franz Steiner.
- Hinds, Martin and El-Said Badawi
 1986 *A Dictionary of Egyptian Arabic*. Beirut: Librairie du Liban.
- Hobbs, Joseph J.
 1995 *Mount Sinai*. Austin: University of Texas Press.
- Holm, John
 2000 *An Introduction to Pidgins and Creoles*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Ingham, Bruce
 1982 *North-east Arabian Dialects*. London and Boston: Kegan Paul International.
 1994 *Najdi Arabic: Central Arabian*. Amsterdam and Philadelphia: J. Benjamins.
- Johnstone, Thomas M.
 1967 *Eastern Arabian Dialects Studies*. London: Oxford University Press.
- Kaye, Alan S.
 1986 The verb 'see' in Arabic dialects. In Joshua A. Fishman et al. (eds.) *The Fergusonian Impact: in Honor of Charles A. Ferguson on the Occasion of his 65th Birthday*, pp. 212–221. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- Nandris, John G.
 1990 The Jebaliyeh of Mount Sinai, and the land of Vlah. *Quaderni di studi arabi* 8: 45–90.
- 西尾哲夫
 1986 On the pronominal suffixes in Proto-Colloquial Arabic. 『言語学研究 (Linguistic Research)』 5: 1–24。
 1990 On the modal function of the Arabic particle *qad*: A contribution to the typology of modality. 崎山理・佐藤昭裕編『アジアの諸言語と一般言語学』 pp. 313–340, 東京: 三省堂。
 1991 「16～17世紀のアラビア語エジプト方言——大英図書館蔵ゲニザ文書 Or.7768 を資料として——」 『オリエント』 34 (2): 54–73。
 1992 *A Basic Vocabulary of the Bedouin Arabic Dialect of the Jbāli Tribe (Southern Sinai)*. (Studia Culturae Islamicae No. 43). Tokyo: Institute for the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies.
 1996 Where does the wadi come from?: the cognitive space of the Sinaitic bedouin. In Shun Sato and Eisei Kurimoto (eds.) *Essays in Northeast African Studies*. (Senri Ethnological Studies 43), pp. 189–206. Osaka: National Museum of Ethnology.
 2000 「ジバリー」(事典項目) 大塚和夫他編『世界民族事典』 東京: 弘文堂。
 2001 「中東イスラム世界における「聖者」発生の社会的・認識的メカニズム——エジプト・南シナイ地域の事例研究」 『国立民族学博物館研究報告』 25 (4): 487–536。
 2003 Is Bedouin Arabic prestigious?: Examining an ethno-cultural fantasy. In Akira Usuki and Hiroshi Kato (eds.) *Islam in the Middle Eastern Studies: Muslims and Minorities. JCAS Symposium Series 7*, pp. 175–183. Osaka: The Japan Center for Area Studies (JCAS), National Museum of Ethnology.
 2005 『ジバリー・アラビア語 (エジプト・シナイ半島南部) の言語人類学的研究』 (京都大学大学院文学研究科提出・博士学位論文)
 2006 『アラブ・イスラム社会の異人論』 京都: 世界思想社。
- Nishio, Tetsuo and Jun'ichi Oda, Shizuka Nakamichi, Shoko Morita
 1999 *A Dictionary of Arab Tribes (Asian and African Lexicon 34)*. Tokyo: Institute for the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies.
- Palva, Heikki
 1991 Is there a North West Arabian Dialect group? In M. Forster (ed.) *Festgabe für Hans-Rudolf Singer zum 65*, pp. 151–166. Frankfurt am Main: P. Lang.
 1994 Review article of Nishio 1992. *Studia Orientalia* 73: 277–281.
- Prochazka, Theodore
 1988 *Saudi Arabian Dialects*. London and New York: Kegan Paul International.

Rabin, Chaim

1951 *Ancient West-Arabian*. London: Taylor's Foreign Press.

Rosenhouse, Judith

1984 *The Bedouin Arabic Dialects*. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.

Thomason, Sarah G.

2001 *Language Contact: An Introduction*. Washington, D.C.: Georgetown University Press.

Thomason, Sarah G. and Terrence Kaufman

1988 *Language Contact, Creolization, and Genetic Linguistics*. Berkeley, CA: University of California Press.

Versteegh, Kees

1984 *Pidginization and Creolization: The Case of Arabic*. Amsterdam: John Benjamins.

1997 *The Arabic Language*. Edinburgh: Edinburgh University Press.

Viberg, A.

1983 The verbs of perception: a typological study. *Linguistics* 21: 123–162.

